

る方は害にて。害に似たる方は利なりと云ふ也。天の理はいきる方をよしとすることは。生きとし生けるものは。皆知りて居ること也。誰一人死するを好むものなければ。是活の尊きことは。皆々知りてをること也。故に聖人は不敢の方へいさむけれども。此不敢の方が却つてむづかしき也。人が此方の頭をうつ。チキにうちかへすは敢に勇なる也。黙してうちかへさぬが却つてさうさもなきことなれども。其さうさもない方がむづかしい也。

天之道。不<sub>レ</sub>争<sub>ハ</sub>而善勝<sub>チ</sub>。不<sub>レ</sub>言<sub>ハ</sub>而善應<sub>ジ</sub>。不<sub>レ</sub>召<sub>サ</sub>而自來<sub>リ</sub>。攄然<sub>トシテ</sub>而善謀<sub>ル</sub>。天網恢恢。疎<sub>ニシテ</sub>而不<sub>レ</sub>失<sub>ル</sub>。

失當作漏與謀叶韻

死の方へよらずして活の方へよるは。天の理也。黙して居るは。争はぬ也。それ故に死せずに行くは勝たる也。やはらかなれば吉が来る。ギクシヤクリきめば凶が来る。言はずしてよう應ずる也。此理といふものは。取り寄せてから来るではない。自然に此理に吉事がついてをる也。繹は。絲に従ひひとへに従ふ。總なぞのやうに何萬すぢもある天理なれとも。此方からの取り用ひやうにて。一筋一筋に丁寧相談をしてくれるものは天の理也。其うへに天の網といふものありて。善をすれば善の網にかゝる。悪をすれば悪の網にかゝる。もらすことはなきもの也。主殺親殺などの是非にとらへられて刑せらるゝは。即ち天の網にかゝりたる也。恢は。ほのかと訓ず。ないやうであること也。疎は。まばら也。

民不<sub>レ</sub>畏<sub>レ</sub>死<sub>ヲ</sub>。奈何<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>死<sub>ヲ</sub>懼<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>。若使<sub>ニ</sub>民<sub>ヲ</sub>常<sub>ニ</sub>畏<sub>レ</sub>死<sub>ヲ</sub>而爲<sub>レ</sub>奇<sub>者</sub>。吾得<sub>ニ</sub>執<sub>ヘテ</sub>而殺<sub>ス</sub>之<sub>ヲ</sub>。孰<sub>レ</sub>敢<sub>テ</sub>常<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>司殺<sub>者</sub>者<sub>ヲ</sub>殺<sub>ス</sub>。夫司殺<sub>者</sub>。是大匠<sub>也</sub>。夫代<sub>ニ</sub>大匠<sub>ヲ</sub>斲<sub>者</sub>。希<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>傷<sub>ニ</sub>其手<sub>者</sub>矣。

七十四章

奇はかたひらなることゆゑ。人を殺して己ればかり利すること也。司殺者は。町奉行など人を殺す役目の者也。斲は。けづる也。扱人々が死を畏るゝは天性也。死を畏るゝでもちたる者也。死を畏るゝ故に。上には刑を設けて。御法度を背けば殺すぞといへば。人が畏れて法度を守る也。扱こゝに人が一人ありて人を殺す。是は已に人殺なれば。此人は殺さるべきにきはまりたるもの也。如此殺すべき男なれども。途中の往來の人は殺さぬ也。此の人殺しを殺すものは。御役人ありてその役人が殺す也。譬へば役人の罪人を殺すは。大工が木をけづるやうなもの也。其天職也。大工でもないものが大工のすることすれば。必ず手足にけがをすること也。すれば殺す役でもなき人が罪人を殺せば。やはり此人も罪人にて御とがめを蒙る理也。此章は孟子の沈同以其私問章と同じこと也。當時の諸侯は。皆民を苦め殺して樂むなれば。是當時の諸侯は殺さるべき罪ある人々也。されどもたゞの諸侯からは伐たれぬ也。天吏というて天より仰せを蒙りたる天の御役人にならねば。不屈の諸侯を殺すことならぬ也。天吏は即ち殷湯周武也。

七十五章 民之饑、以其上食、稅之多。是以饑。民之難治、以其上之有爲。是以難治。民之輕死、以其求、生之厚。是以輕死。夫唯無以、生爲者、是賢於貴、生。

飢は。ひだるき也。税は。御年貢米也。民のひだるがるを目のこ算用にして見れば。上の御年貢米の取り上げやうが多い故ぢや。民の治まりにくきを目のこ算用にして見れば。上で自己流に治めて天の理にちがふ故ぢや。民の刑せられて死ぬるを何とも思はぬやうに見ゆるを。目のこ算用にして見れば。あまりいのちを大事にしすぎる故ぢや。己れが身にリツバにさせずば長命であるまい。旨いものを食はずば長命であるまい。人の物を盗んでも。衣せ食はせするは。あまりいのちを惜みすぎるのではなしや。命が惜しいから盗むといへども。盗めば命を取らるゝ也。すれば死ぬるを何とも思はぬは。死ぬまいゝとする故也。然れば死ぬまいゝとせぬ男は盗まぬ也。死ぬまいゝとする男よりは。死ぬまいゝとせぬ男の方が長命也。

七十六章 人之生、也柔弱。其死、也堅強。萬物草木之生、也柔脆。其死、也枯槁。故堅強者、死之徒。柔弱者、生之徒。是以兵強、則不勝。木強、則共。強大、處下。柔弱、處上。

共當作供

人の生れたるときには。ブヨゝとやはらかによわきもの也。死ぬるときは。年がよりて手足が金の火箸を見るやうに。ギクゝしてまがることさへできにくき程。かたくてつよきもの也。人ばかりでなしに。天地の間の萬物草木に至るまで。はえるときはやはらかでもろきもの也。枯れるときはピンピンと折れる也。左すればかたくつよき方は死のくみ合にて。やはらかによわき方は生のくみ合也。故に軍兵などは人をきり殺すものゆゑ。いかにもつよきがよさそうなものなれども。つよきのは勝たぬ也。殷湯周武の軍は。極々にやはらかなるもの也。共は。供の字の誤りなるべし。供はアテガヒと譯す。つよい木には重きものをあてがふ也。天秤棒は椶の木でつくる故に。かしの木は折れる也。重きものをなふせい也。其上に草木にても大きな方は。却て下にある也。やはらかなる方が上のよき位に居るなれば。兎角やはらかにしくはなし。

七十七章 天之道、其猶、張弓與。高者抑之。下者舉之。有餘者損之。不足者補之。天之道、損有餘而補不足。人之道、則不然。損不足、以奉有餘。

張弓は唯弓といふこと也。一體は作弓に作れば大によみよけれど。張弓にて弓と讀みて弓をつくることにする也。天の道といふものは。弓を作り立つるときにしかけに似て居る也。高い處はおさへつけてひきくして。下い處をばもちあげて高うする也。禮の賢者は俯して就き不肖者は企てゝ及ぶと云

ふと同じ意にて。中が即ち天の道なれば也。餘りある方をけづりへらして。不足なる方に足す也。これ程よう天の道に叶ひたるものはなき也。人の道は自己流也。今の天下は天の道の勢に非ず。自己流の勢也。秦楚は大國なれば有餘の國也。魯衛の小國なれば不足の國也。秦楚から軍を起して。魯衛をだんくけづりとする。是れ不足の方をけづりて有餘の方を補ふ也。天の理に非ず自己流也。人の了簡也。天の了簡に非ず。天の禍を蒙むるべき筈也。

孰能有餘以奉天下。唯有道者。是以聖人爲而不恃。功成而不處。其不欲見賢。

人の智愚は國の大小のやうなるものなれば。天の理によつて見れば。智者は愚者を補ふべき筈のこと也。今天下に大の不足なる者は智也。故に大智眞智をさへげて天下の不足を補ふものは。唯有道の人ばかり也。故に聖人は天職のこと故に。天下の不足を補ふ也。譽められやうというてさへげ出すにあらず。己れが自慢に不足を補ふにも非ず。天職を大事に勤むる心ゆゑ。先きで取り用ひやうが取り用ひまいが。そこにはかまへなし。骨を折りてさへげて。心に智を待みてほこるに非ず。功のなるをじまんして功に居る氣もない。殊に賢智はわしの方にあると云ふことを人に知れぬやうにするが。聖人ぢや。

天下莫柔弱於水。而攻堅強者。莫之能勝。以其無

以易之。弱之勝強。柔之勝剛。天下莫不知莫能行。

天下にあらゆる萬物のうちにて。水ほど柔かにて弱きものはあるまじけれども。かたきつよきものを自由にしやうと云ふときは。必ず水をかりて水にてやはらかにするに。水の自由にならぬものはなし。水よりも又柔かなるものあらば。それをかりてかたきものを柔かにすべけれども。水ほど柔かなるものはなうて。水のかほりをするものが無いと見えて。水を必ずかること也。然れば弱きものゝ強きに勝ち。柔かきものゝ剛きに勝つは。天下の人々誰一人も知らぬものはなければども。其事を心にうつして。心をやはらかにもちてこはきに勝つことをば知らぬ也。

是以聖人云。受國之垢。是謂社稷主。受國不祥。是謂天下王。正言若反。

垢は。あか也。第一にむさきもの也。聖人の辭に。國の極々むさきものを受けてとるが。社稷の主といふものぢや。國の極々の不吉のことを集めて心に受けとめて居るが。天下の主ぢや。うそもつかすまつすぐにものを言へば。どうかうらはらのやうぢやと云ふは。國の目出度ことばかり心にとめて。ケ様にすれば昇平ぢや。ケ様にすれば民が悦ぶ。ケ様にすれば鄰國も親むといふはなしは。せずとものこと也。それよりも第一のあかを吟味すべき也。國のあしきことばかり心にとめる也。ケ様にしたらば亂が起らう。ケ様にしたらば。民がそむくであらう。ケ様にしたらば鄰國が攻め來て此方の國が

亡ぶるであらうと。ケ様にあしき方ばかりためて此を心におけば。悪しきことをする氣遣ひなき也。亂亡をば棚へ上げておきて。目出度ことばかり算用してゐるゆゑ。謀叛人の出来るをも知らず。出来てもあしらひやう知れぬ也。皆あしき方を算用せぬゆゑ也。社は。地を祭る御社頭也。稷は。周の先祖后稷を祭りて五穀成就を祈る御社頭也。此社壇稷壇は。國主でなければ立つることならぬ也。國主は土地をもちて居るものなれば。社壇稷壇ある也。故に社稷とは。御家御國といふことになる也。

七十九章 **和** **大怨必有餘怨** **安可以爲善** **是以聖人執左契而不責**

於人

六十三章に大小多少報怨以德といふ二句は。即ち此不責人の下に入るべき語也。是は喧嘩の中なほりをするときの法也。和は和睦也。契は手形キツテ也。一枚の板へわり印をして。一枚づゝとりかはして後日の證據にするもの也。故に左契右契といふ也。扱大にけんくわをして怨をふくみて居る人の和睦をするときに。和睦はしたれども。前の通りに心のとけぬは。まだ上手に中をなほしたといふものではない。然らばどうするが上手に中をなほしたといふものぢやといへば。懷中に證文があるから。人が何といはうがかまはぬといふこと也。是は譬へば人と中をなほるときには。必ず始め喧嘩をしたるユクタテをいふ也。ユクタテをいふ故に。さきの男のいひぞこなひたることをいはねばならず。扱貴公がかういうた故に。わしがかういうたといふ也。さきの男のわるいことをもいはねばならぬ也。

さきの男は己れがわるいことをいふゆゑに又怨む也。故に餘怨といふ也。餘怨のなき仕方は。左契をとることが甚だ宜し。證文を懷中してをるとは。貴公がかういうたのなんのと言ふことをばいはぬ也。唯ひたすらにわしが悪いからかんにんしやれといふ也。わしが皆わるいというても。皆わるうなきこととは天が御承知也。何というてもかまひなきことではなしや。天の御上覽の上でいうたこと也。天がきゝてゐたることなれば。是れ天の左契を己れが懷中してをる也。人は天の御支配御家來也。天の心にさへ叶へば。人は何といはうが不替也。故にたとへ過り證文にせい。己れがよいづくつならば。何百枚書きても辱にならぬこと也。天の御上覽なればトンとかまはぬこと也。人を責むるに不及こと也。人はタワイもなきもの也。此方の目あては天也。天の理にさへ叶へばトンとかまはぬこと也。

**有徳** **司契** **無惡** **司徹** **天道** **無親** **常與善人**

有徳は。有智也。無徳は。智にかまはず唯大きく天を一目に見て居る男也。徹は。すき通る也。水晶の中に物を入れて見るやうなるを云ふ。司は。つかさどると訓ず。故に忘れずにチャント心にとめおくこと也。譬へば人に金をかす。扱かり方の人。からぬといひはりて金をかへさぬ也。此時に證文を取りておかねば。どうもかんにんがなりかぬる者也。證文が懷中にあれば。かんにんが出来る也。なせならばいつでも證文を出せばわかることゆゑに。かんにんがなる也。番所公儀になりても。證文があれば。此證文を出せば。かり方の首が落ちると思へば。内濟にもする也。かさぬふんにもする也。

證文をとりてあかねば。證據がなきゆゑにかさぬふんにはされぬ也。内濟にはされぬ也。今何より明かな天の上覽をうけて。かしたに相違ないと思へば。證文がなくても。天の證文を懐中して居ると思へば。かんにんが出来る筈也。ケ様のときに天の證文が懐中にあると思つてかんにんするは。是れ契を忘れず心にためておく也。又智にかまはずに唯大目に天を一日に見る男は。天の證文にもかまはぬ也。唯すきとほして見る也。あの男の金もこの方の金も。天下の金ぢや。此方にありてもよし。あの方にありてもよし。其上にわしをあの男ぢやと思へば。わしが金也と大きくすましておく也。唯天の道といふものは善の方へくみするものは。さがまがるぶんはかまはぬといひて不咎也。

八十章

小國寡民。使有<sub>レ</sub>什佰之器。而不<sub>レ</sub>用。使<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>重<sub>レ</sub>死。而不<sub>レ</sub>遠<sub>レ</sub>徙。雖<sub>レ</sub>

有<sub>レ</sub>舟輿。無<sub>レ</sub>所乘<sub>レ</sub>之。雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>甲兵。無<sub>レ</sub>所陳<sub>レ</sub>之。

國が小なれば。民は寡き也。是れ至りて小さき城下也。至つて小さき城下といふものは。民も貧にて人の往來も少なきもの也。されども今時にても吸物椀も二十人前か三十人前は。テントに持たねばならぬもの也。どんぶりも入れば。なら茶茶椀も入るもの也。故に一軒まへに十倍百倍の器がなければならぬ也。是が他より來る客がある故也。客がなければ。己れがうちの人の膳椀だけですみたるもの也。他國他村へなせに互に往來をするぞといへば。商をしてまうける故也。商ひに他國他村へゆくに。山をこえ川を越ゆる故に。虎狼に喰はれて死ぬるもあり。舟がかへりて溺死するもある也。民が

死ぬることをいやに思へば。他國他村へ商ひにゆかぬ理也。是れ民が死を重きこと、心得て。あぶない路をこえぬ理也。徒は。一體は引移ること也。故に一日にても一日にても遠くへゆくを徒といふ也。扱民が死をこはがれば商をやめる理也。又古へは己れが畑に出來たるものを菜にして。田に生えたる米をくひて。家で織るものをきて。己れが林に出來たる木で家を造りて住まひたるもの也。ケ様なればトンと商ひに出るわけもなければ。小城下のせまき所はなほさらのこと。客前の膳椀はいらぬ也。これ十百の器も無用也。民も隣村へもゆく用事はなき也。隣村へも往くことがなければ。舟いらす車いらす。有つても乗ることなき也。況んや己れが村で用事残らずたりれば。何しに人の國をせめ取らうと思はんや。よろひ太刀双物ありても。是をならべたつる所なき筈也。

使<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>結<sub>レ</sub>繩<sub>レ</sub>而用<sub>レ</sub>之。甘<sub>レ</sub>其食。美<sub>レ</sub>其服。安<sub>レ</sub>其居。樂<sub>レ</sub>其俗。隣國相望。鷄犬之聲相聞。民至<sub>レ</sub>老死。不相往來。

古へは文字なし。覺えは帳面なき故に。繩を結びて大小をわけて覺えし也。今の俗をだん／＼古へに道きて。後には繩を結びし古へにかへしたらば。又古への民になるべし。古へは食物はヒエのだんごより外はなければ。ヒエのだんごほどむまきものはないと。天下中の人が思つて居る也。衣類は藤布のタフより外はなければ。タフ程リツバナ衣類はなしと思つてゐねばならぬ也。藤からげの家にネコダを布きてゐるより外になければ。ネコダほどよき普請はなしと思つてゐねばならぬ也。是を極々の

けのこうな驕奢ぢやと思つてゐる。智慧は今から見れば大にアハウに見ゆれども。それより外の智慧なければ。是を大智なる風俗ぢやとうれしう思つてゐねばならぬ也。左様のときは。隣村から隣國へヅラリと續きて人の住まふ筈也。軍は無し。人のへるわけもなければ。人は大せいになる理也。故に家つゞきになりて。向ふからはこちらが見え。こちらからは向ふが見えても。何もゆく用事はなき也。雞の聲も犬の聲も聞えあひて斷間もなう。民が住んで居れども。住來することはあるまじ。

八十一章 信言不美。美言不信。善者不辨。辨者不善。知者不博。

博者不知。聖人不積。既以爲人。己愈有。既以與人。己愈多。天之道。利而不害。聖人之道。爲而不爭。

辨は。白黒をわけて辨舌を明かにふるふ也。積は。つみためる也。扱此一部は。うそなしにホンのことばかり也。ホンのほなしといふものは。美しうはなきもの也。又美しう面白きはなしは。大方はうそなもの也。上手な男は。わしは上手でござるというて辨舌をふるはぬもの也。辨をふるふものは。上手でなきもの也。理はひと筋なるものなれば。一色の筋を極めれば。其餘は知れるもの也。あちらもやつて見。こちらもやつて見る男は。きはめ知ることならぬもの也。聖人はことを知りても。己れが心に積みためて施さずにおくといふやうなことをばせぬもの也。人を見ることが。己れが智をこゝろみる也。人が何ぞ相談をすれば。大に智をふるひて考へてやる也。これは人の爲のやうなれども。や

はり己れが智のふえる理也。唯天の道といふものは。萬物の勝手のよきやうに利して。決して害することのなきやうにとしたるもの也。聖人の道は。天の理にのつとりたるものなれば。物にさかはぬやうに争はぬやうにしたるものなれば。人に道を教へ傳ふるにも。唯いかにもやはらかに争はぬやうに。己れが説を容るゝこと也。

老子國字解卷六終

題 老子摘解首

家君中年より。老子の説を喜び。嘗て其中の數章を取り。國字にて之を解し。以て讀老の方を示す。名けて老子摘解と云ふ。既にして析玄の著あり。摘解は長く廢しぬ。予頃ス舊稿を閲するに。析玄は實に其説を敷衍したる者なり。然りと雖も。析玄の言ひ及ぼさざる所あり。一切に廢棄するは惜むべし。析玄は簡古にして。其趣を窺ひ易からざる者あり。若し此本を以て楷梯とせば。初學に於て益めらんか。文字重複の所は。今刪除するに及ばず。之を並存す。凡二十一章なり。

廣 瀨 孝 識

# 老子補解卷上

苓陽廣先生著

男 孝 校

## 道可道章

道可レ道トス 非ニ常道ニ 名可レ名トス 非ニ常名ニ

道とは。人の行ふべき道なり。親に事へ君に事ふるに。皆相應の宜しき所あり。其仕方を指して道と云ふなり。譬へば。親に事ふる道は。隠すことあつて犯すことなし。之を孝と云ふ。君に事ふる道は。犯すことあつて隠すことなし。是を忠と云ふ。然れども。孝の道を以て君に事ふれば。不忠となり。忠の道を以て親に事ふれば。不孝となる。忠孝みな常名にあらず。常とは何方に持ち行きても。易はらぬ所を云ふ。常久不易の道と云ふ心なり。名とは。孝と云ひ。忠と云ふ。即ち名なり。身の行ふ所よりいへば。道と云ひ。口の稱する所より云へば。名と云ふ。實は同じ物なり。

無名天地之始。有名萬物之母

右の如く。天地の始めより。道と云ふ者は。常道あれども。何とも名は付けられぬ故。名は無かりしなり。世開くるに及んで。自然と物の名できて。孝不孝忠不忠の差別明かなり。其のち名より名を生



じ。萬物それぞれに名定まりたり。是も萬物は開闢の始めよりある者なれども。名出來るに及んで。始めて見はれて。萬物新に出生するが如し。故に萬物の母と云ひたる者なり。

常無欲以觀其妙。常有欲以觀其微。

二句は。學者の工夫を云ひたるなり。常無とは。常無名なり。常有とは。常有名なり。先試みに。道に名を付けずに置いて觀るべし。何方に向けても。滯ると云ふことなく。誠に妙なる者なり。又試みに。世間の通り。事々物々に名を付けて觀るべし。名のかず千萬あり。彼理は此に通じ難く。此道は彼に差支ふる。即ち微あるなり。微とは。國界のしるしなり。通ずる所あり。通せざる所あるなり。

此兩者。同出而異名。同謂之玄。玄之又玄。衆妙之門。

兩は妙と微となり。同じく玄妙の理なり。又其奥に。二つの者の出づる所あり。是を又玄と云ふ。此所一切の妙。みな其中より出づるなり。こゝは誠に言語に絶えたる場所なり。

此章は。老子の首章にして。立言の大意を述べたるなり。凡そ物質あれば名あり。然れども。名立つて實離る。莊子に。名者實之賓也と云へり。然るに。世人名に惑うて實を失ひ。信と云へば。尾生の信の如きことを認めて實とし。直と云へば。直躬が直の如くなる。夫故老子は物に名を付けず。是を無名の學と云ふ。然りと雖も。一向名を廢しては。世上不通用なり。能く其道理を知つて行へば。名ありと雖も害なし。名をのくれば。滯りなく妙なることは。勿論なり。名ありと雖も。其道理を能く合點して。名實離れざる様にすれば。是亦一種玄妙の理なり。故に同謂之玄と云へり。凡一切の是非利害。皆假りに設けたる名にして。其實は糾へる繩の如く。分別し難き者なり。いはゆる。東家の西は。西家の東にて。佛家の語にも。本來無東西。何所有南北と云へり。莊子に。老子の學派を論じて。建之以常無有とあり。是即ち常無常有なり。是を二本柱と立て。道理を説く。此道理は。手近く譬へば。當時流行する真金銀札の所にて曉るべし。常道常名は。真金の如し。天下に通用せざる所なし。是妙なり。假道假名は。銀札の如し。其國にて用立つ所は。真金同様なれども。境の外に持ち行きては。一錢にもならず。忠は孝にならず。孝は忠にならぬ類なり。是微なり。又玄とは。玄の一層奥に又玄あり。夫より一切の妙所出づると云ふことなり。此一層と云ふは。有にも非ず。無にも非ず。總じて道理を説く者は。是までと刊行におしたる様に言はれぬ者なり。夫故此の如き所に歸するなり。後世或は又玄と云ふ所より。一種の境界を開き。種々の説を爲すは。讀書の理に暗きなり。

天下皆知章

天下皆知美之爲美。斯惡已。皆知善之爲善。斯不善已。

美はうつくしきことなり。惡はみにくきことなり。美しき物も。うつくしと見ゆる程になりては。後は見にくくなる。善事も。善と見ゆる程にあれば。後には又疵が出て不善となる。美も善も。人の知らぬ様にあるが。真美真善なり。其仕方は。後に云ふ無爲にあり。

### 故有無相生<sup>フ</sup>。

是より以下は。譬へを引て。前二句の意を明せり。譬へば。人の金銭を畜へたるは有なり。之を用ふれば無となる。是有より無を生ず。一錢もなきは無なり。さすれば是非出精して畜ふる様になる。は無より有を生ずるなり。

### 難易相成<sup>シ</sup>。

川下より舟に乗つて。川上に行くは難し。歸りに下るは易し。是難より易を成す。初め川下に下るは易し。歸りに上るは難し。是易より難を成すなり。

### 長短相形<sup>シ</sup>。

一丈の物を。二つに切つて用ふる時。始めを六尺に切れば。残り四尺に成つて短し。始めを短くすれば。後長くなる。是長短相形するなり。

### 高下相傾<sup>フ</sup>。

傾とは。向ふの物を此方へ移し取るなり。譬へば。川の上に岸あれば。岸の土川へくへこむ様になる。是卑きより高きを傾くるなり。其あとは。川さらへありて。川の泥を岸に上ぐる。是高きより下を傾くるなり。

### 音聲相和<sup>シ</sup>。

吾より人にもいへば。人より吾に答ふ。吾惡聲を以てすれば。人亦惡聲を以て答ふ。吾美言を以てすれば。人亦美言を以てす。是相和するなり。

### 前後相隨<sup>フ</sup>。

見物事ある時。吾人の前に居るは前なり。事終つて後。引退く時は。前に居る者は。必ずあとにあくれ。後に居る者は。必ず前に出づる。是前と後と相隨ふなり。以上の譬へ。皆前に善あれば。後に惡あり。左に利あれば。右に害あり。故に前に云つたる。美は惡となり。善は不善となるわけは。是にて知るゝなり。譬へば。人危急の病あるに。醫師劇劑を用ひて之を愈やす。是美なり。善なり。病人も大に活命の恩を感ずるなり。然れども。其藥毒残りて。又外の所に痛みを生ず。是惡なり。不善なり。其時は又醫師を怨むるなり。一切の世事。皆此の如くなるゆゑ。容易に手の出されぬ物と云ふ意なり。

### 是以<sup>テ</sup>聖人<sup>ハ</sup>處<sup>リ</sup>無爲<sup>ノ</sup>之事<sup>ニ</sup>。行<sup>フ</sup>不言之教<sup>ヲ</sup>。

是以とは。前に云ふ如く。世間の事は。一切手の出されぬ物ゆゑにと云ふことなり。聖人と云ふは。智慧深うして。過去現世未來を。一目に見通したる人なり。世事は手の出されぬ物ながら。世に居て。木佛の如くにして居ることは。ならぬことなり。夫故に無爲之事と云ふものあり。如何程しても。一向

せぬと同じことなり。不言之教とて。如何程いうても。言はぬと同じことなり。聖人は之を行ひ給ふ故に。後難を免れ給ふなり。

萬物作焉而不辭

是より以下は。無爲の事の仕様を説くなり。萬物とは。萬人と云ふが如し。作とは。事を思ひ立つなり。不辭とは。萬人より思ひ立つて。此方に頼む時は。辭退せずして引受くるなり。萬人の頼みに付き。據らなくすることなれば。如何程の事をして。吾するに非ずして。人よりせしむるなり。是即ち無爲之事なり。

生而不有。爲而不恃。功成而不居

此三句は。事成就したる上の心得を云ひたるなり。生は事の出来るなり。有するとは。我ものにするなり。恃は功を恃むなり。三句皆同じことなれども。くりかへして委しく云ひたるなり。扱人の頼みに付て事を起す。萬人一同に望むことなれば。格別骨折らずとも。功は成就するなり。其成就したる時に。我功にせず。吾は人のあとに付て働きたるなり。事の成るは。諸人の功なり。我功にあらずと云うて。恩賞なども。少し斗り受納して。早速其場を立退くなり。是を生而不有。爲而不恃。功成而不居と云ふなり。是までが無爲の仕形なり。

夫唯不居。是以不去

此二句は。無爲の機能を述べたるなり。功を人に譲るは。損の如くなれども。實は然らず。凡そ成ることあれば。必ず敗るゝことあるは。前に述べたる譬への如し。故に功を我物にすれば。又々後難にかゝり合ふことあり。早く立退く時は。其患へなくして其身も全く。名譽も後に残るなり。是居らぬ故に。去らぬと云ふ理なり。是即ち眞美眞善なり。我功名を人に譲る故に。諸人之を目ざさず。後の禍なし。無爲とは。人形の如く何もせぬには非ず。また人が思ひ立てば。何時も同意するにも非ず。凡そ事は始むべき時節あり。其時に我より始めざれば。是非とも人より始むるなり。人の始めたる上にて之に従ふ。は無爲なり。不言之教は。無爲之事に准じて知るべし。我言ふべき事を言はずに置けば。人より我に言はしむる。我言ふに非ずして。人の言ふなり。是不言之教なり。

三十輻共一轂章

三十輻共一轂。當其無有車之用

此章は。無の妙用を明したる者なり。輻とは。車のひのあしなり。輪一つに付き三十本あり。其れが中の轂と云ふ者に。はさみてあるなり。轂の中。空虚なる所あり。能く輻を運動す。故に車舞ふなり。轂の中の何もなき所。第一緊要の所なり。三十本の輻も。何もなき所ある斗りにて。用に立つなり。

埏埴以爲器。當其無有器之用

埴とは。ねば土なり。燒物にする土なり。埴は調合するなり。ねば土を調合して。茶碗其外の器物をつくる。其器の用に立つ所は。器の中の空虚なる所が。用に立つなり。茶碗の細工は。色々妙なる者あれども。畢竟は何もなき所が。用に立つ所なり。湯茶を盛るも。物を入るも。極意この空虚なる所が。用に立つなり。

鑿戸牖以爲室。當其無有室之用。

牖をあくるにも。色々細工はあれども。畢竟は牖の中の何もなき所がある故。其間より日月の光さし込んで。一室を照すなり。一室の細工。千差萬別なれども。牖の中の空虚なる所が。入用の所なり。以上の三喻。三事なれども。其道理は一なり。何事も空虚なる所が。第一の入用の所なり。

故有之以爲利。無之以爲用。

故とは。前三ヶ條の故を以てなり。三十本の幅の。人の利になるも。器牖の用に立つも。皆無と云ふ者が。極意の入用なり。無がなくては。如何程立派の細工にても。一向用に立たず。世事も亦此の如し。この所より考へて。無の大切なことを知るべしとなり。

此章は。主章の常無欲以觀其妙と云ふを。委しく述べたるなり。其外八十一章の中。常無觀妙の理は。毎度之を云へり。此章最も明白にして。近く譬へを取りたる者なり。世人唯有用立つことを知つて。有と云ふ者は。無ありての上にて。始めて用に立つなり。同じく用をなせども。無の功尤も上に居ると云ふことに心付かず。故に丁寧反復して之を述べたるなり。

有無と云ふこと。老子第一の要義にして。易に陰陽あるが如し。是を佛説にすれば。地水火風を天地とす。是有なり。其上に空氣と云ふ者あつて。之を運用す。是即ち無なり。天地の位を得。日月の運行。風雷の變化。總て空氣あつて。其間に行はるゝなり。空氣なければ。萬物壞るゝなり。人の息を物にて塞ぎたるが如し。人は一日二日食せずとも。死することなし。空氣通ぜねば。忽ち死するなり。故に萬物無に依つて生活せざるはなし。扱無を離ると離れざると。動靜に因るなり。靜なれば離れ難く。動けば離れ易し。是虛靜を貴ぶ所以なり。先づ此大意を知つて。無の妙用萬物の上にあることを知るべし。造化即ち無なり。是は眼前の理にて。人の知りたることなれども。人却て之をおろそかにするなり。今老子擧ぐる所の三條は。極めて瑣細のことに付て。其理を明すなり。無と云ふことを。人の行ひにすれば。論語に君子不器と云ふ。是即ち無なり。舜十六相を擧げ。己れは己れを恭くして南面するのみ。故に古人老子を評して。人君南面の術なりといへり。然れども。老子の意は。萬事に付けて。己れは無の處に居り。人を有の處に用ふるなり。其意は之を言へば頗長し。今暫く之を略す。有無二字の義に付。後世種種の議論あり。無にも階級を立て。是は有に對するの無。是は有無を離れて。其上に一ある無など云ふ。是皆莊列以後の議論にて。老子には言はぬことなり。老子の主意は。形あるを有と云ひ。形なきを無と云ふのみ。何も外に高妙なることなし。唯其無中に有あり。虚中に實あり。退中に進あり。靜中に動あり。變化測られざる所を。孔子も龍の如しと歎じ給へり。世人莊列を

見るに習うて。無の字に種々の鑿説を唱ふ。其言高妙に似たれども。實は何の用にも立たぬことなり。此處老子を見るに付て。緊要なり。今槩略を是に載す。

古之善爲士者章

古之善爲士者。微妙玄通。深不可識。夫唯不可識。故強爲之容。

此章は。老子嘗て孔子に告ぐるに。君子盛徳容貌如愚と云へり。此章即ち如愚の形容をせし者なり。古の善き士は。其人となり。中々外よりは。推察出来ぬなり。夫故何とも形容し難し。今述ぶる所は。強ひて之が形容をなす者なり。微妙とは。微にして見難きなり。玄通とは。ぬけとほりて障りのなきことなり。是は誠に愚なるに非ず。唯外より知り難き故。自然と愚人の如くに見ゆるなり。

豫兮若冬涉川

豫は猶豫なり。寒中衣を脱ぎて川を渡る時は。寒を畏るゝ故。誰もうぢくとするなり。萬事に付き。ためらひて埒の明かぬ氣色。是に左も似たり。

猶兮若畏四鄰

猶も猶豫なり。是も諸事ためらひて。か様にしたらば。前の人が何とせんか。か様に言ひたらば。後

儼兮其若客

儼は嚴格なる貌なり。人の中に出て。木人形の如くにして。笑もせず。語りもせず。唯客人の如く構へて居るなり。

涣兮若冰之將釋

間には言ふ時もあり。併しハキと云はぬなり。氷の半は解け。半は解けざるが如し。

敦兮其若樸

敦はあつきなり。樸はあらげづりなり。いかにもあらげづりにて。飾は少なく見ゆるなり。

曠兮其若谷

曠は空虚なり。谷の中の空虚にして。一物もなき様にも見ゆるなり。

渾兮其若濁

渾はにごる貌なり。水のかきませくりて。底の濁りたる様に。なにか一物ある様にも無き様にもあり。ハキとせぬなり。

孰能濁以靜之徐清。孰能安以久之徐生。

此一節は。上句の濁るが如しと云ふ語を承けて。其濁るに付けて。一趣向あることを明したり。始の句の尻を取つて。それより趣向を出す。老子の文法なり。扱濁るが如くにする。追々之を澄まさんが爲なり。急に澄まさんとすれば事を敗る。自然と澄む様にすべきなり。又一には物を急にてかさんとすれば。宜しからず。唯安寧にして。自然に生ずるを待つに如かず。是古人濁るが如く見ゆる所以なり。此譬へば。直不疑がごとく深切なり。不疑同舎の郎金を失ひ。不疑を疑ひたれども。少しも申譯をせず。取らぬ者を取りたる分にして。事を済ましたり。其後盗まぬことが自然と分り。言ひ懸けしたる者は。大に過ちを謝したるなり。若し其時急に申譯をしたりとも。必定盗まぬことが分りもせず。人の疑ひも。却て解けぬなり。申譯をせぬのみにて。始めて明白になりたり。盗賊と云ふ名を蒙りながら。其分にて居たること。即ち濁なり。安以久之とは。同人のことにて言はゞ。始は直不疑と云ふ者。何の名もなかりしに。右の件より。長者と云ふ評判高くなり。後に立身を遂げたり。是其福祿辛抱強き處より。自然と生じたる者なり。即ち徐生なり。

保此道者不欲盈 夫唯不盈故敝不新成

右の如く容貌如愚に見ゆるは。畢竟の處。盈滿を嫌ふなり。内既に聰明。外また聰明に見ゆる。是盈滿なり。かくの如くなれば。神怒り人嫉みて。終に禍にかゝるなり。故に内聰明なる程。外愚鈍に見ゆるが。調合宜しきなり。故に盈滿することなし。滿つることなければ。虧くることなし。因て身家

も安然たり。敝不新成とは。舊き者が相續して。易はることなし。夫故新になると云ふことはなし。もとのまゝですむなり。如愚の形容も。處々に見えたり。今其一を釋するなり。

上善若水章

上善若水。水善利萬物而不爭。處衆人所惡。故幾於道矣。

上善とは。善の仕方も種々あり。其仕方の上手なるを上善と云ふ。其仕方は水に似たり。水は一切の物を潤して。利益多き物なれども。されぬことを無理にはせぬ者なり。不爭とは。無理をせぬことなり。人情は高きを好みて卑きを惡めども。水は卑き處を好んで流れ。行き難き方へは行かず。行かるところのみに行くなり。故に聖人の仕方に似て道に近きなり。

居善地

是より以下は。上善の仕方を説きたるなり。地は場所なり。人は身の居り處第一なり。我勝手よくて。人の邪魔に成らぬ處を擇んで居る。是居善地なり。善くすとは。上手に都合よくすることなり。

心善淵

淵は深くして底の見えぬ物なり。人の心も底を見られぬがよし。然れども。底意の知れぬ氣味わるき人と。云はるゝは無調法なり。人に知られず。氣味わるがられぬ様にする。是心善淵なり。

與善仁

人に物を與ふるも。與へ様が下手なれば。格別忝く思はず。又傍より名聞者など云うて譏る者もあり。其所を考へて。ぐあひよく與ふる。是與善仁なり。

言善信

信も尾生が信の様なるは。下手なる信なり。虚を言はず。身の爲めにもよき様に言ふ。是言善信なり。

政善治

民を治むるにも。有爲なる事をすれば。治めんとして。却て亂を招く。無爲にして。人氣に逆らぬ様に治むる。是政善治なり。

事善能

能は才能なり。才能ある者は。事に使はるゝなり。事によれば。使はれ過ぎて。身の迷惑になる。隨分事調ひて。身の迷惑にならぬ様にする。是事善能なり。

動善時

身を動かすに。時節を以てせざれば。人の妨になる。譬へば芝居の中に居るもの。幕を引きたる間に手水にゆけば。見物人の妨にならぬが如し。是動善時なり。

夫唯不爭。故無尤矣。

是は前の七つの譬へを。一つにくるめて言ひたるなり。事は七ヶ條なれども。其仕方を一口にいへば。不爭の二字に歸するなり。善事をさるる時にして。されぬ時はせずにおく。夫故に尤められず。人の爲めにも我が爲めにもなる。是を上善若水と云ふなり。

老子の主意は。世上に善をなして身に禍を招く者多し。是善は善なれども。善の仕方下手なる故なり。夫故身に禍を招きて。人の爲めにも格別ならず。唯水の卑きに流るゝ様に。行かれぬ所へはゆかず。さるゝ事斗りをして置けば。人の爲めにも我が爲めにもなりて。上善と云ふべきなり。其仕方は下に七ヶ條の事を説きたるにて知るべしとなり。但し此内にて居善地と云ふこと。尤も大切なることゆゑ。第一に置きたるなり。凡そ賢人君子の身を殺すに至るは。自身も好む事には非れども。むつかしき瀬にのりかゝりて。善人になるか。悪人になるか。二つに一つの手詰となる。夫故據るなく命を棄て。悪人にならぬ様にするなり。又其時命を惜みて。一生の善行を無にする族も多し。是みな身の居り所わるき故なり。上善をする者は。最初に身の居り所を擇みて。善人にも悪人にも成るに及ばぬ所に居るなり。其上にて。善のされる時節到来すれば。出て善をなし。されぬ時はいつまでもせず居る。善をすれば。人の爲めにも身の爲にもなるなり。せぬとて悪人にはならず。是上善をする手段と云ふものなり。

致虚極章

致虚極 守静篤

此章は。人君の道を明す所なり。虚は實の反對にして。何もなき事なり。致虚極とは。人君たる者は。其心を空虚にして。善をも思はず。悪をも思はぬ様に。極々致し極むべしとなり。静は動の反對にして。動かぬことなり。是は其身を静にして。善事をもせず。悪事をもせぬと云ふ處を。手篤く守るべしとなり。致虚は無心なり。守静は無爲なり。人君は。内無心にして外無爲と云ふ所を。手堅く心得べしとなり。

萬物並作 吾以觀其復

萬物は萬人なり。作るは事を思ひ立つなり。以とは。虚と静との二つを以てするなり。復とは。思ひ立つことをやめて。其前に反るなり。言ふは萬人競つて事を思ひ立ち。來つて挑むと雖も。いつ迄も虚静の二つを守りて居るなり。此の如くすれば。彼も亦自然と思ひ立つことをやめて。本の無事に反るなり。觀とは。觀て待つて居る意なり。

夫物芸々 各歸其根

芸々は多き貌なり。萬物の動き立ちたる時は。芸々として多しと雖も。暫くすれば其本に立ち歸りて。静まる者なり。夏のごころ百蟲みな外に出て動けども。秋冬に至れば。蟄して穴に入るが如し。人も種

々の事を思ひ立つ者あれども。上より取合はずにをれば。自然と休んで本に歸るなり。

歸根曰静 静曰復 命曰常

萬物根に反れば。静かになるなり。静かになれば。天命の本に反る道理なり。天命に歸れば。平常にして易はらぬなり。此三句。大抵同意なり。萬物皆静かなるを根本とし。天命の常とす。動くは變にして常に非ざるなり。

知常曰明 不知常妄作凶

萬物皆静かなるを常とし。動くを變とす。静かなるが常と云ふことを知つて。人は動けども我は動かす。人の静かになるをまつ。是物の理數に明かなると云ふものなり。もし静かなるを常とするの理を知らざれば。人動けば我亦動く。理を知らずして動くは。妄りに動くなり。必ず禍凶を招くなり。

知常容 容乃公 公乃王 王乃天 天乃道 道乃

久 没身不殆

常を知つて静を守る人は。人より如何なる事を仕かけたりとも。争ひ拒むことなくして。黙して之を容るゝなり。是は向ふの人も追々静まると云ふことを知るゆゑなり。此の如く物を容るれば。其心人我の私なき故に。公と云ふ處に叶ふなり。是乃ち帝王天下を兼畜ふるの量なり。又天の萬物を容るゝ理にも叶ふなり。天に叶へば道にも叶ふ。道は天地を生ずる物なり。道に叶へば。永久不滅なり。人



よく此所を知れば。生涯危き事はなきなり。容公王天道久と。段々疊みかけて云ひたるには。深き差別はなし。たゞ反復重疊して。其妙處を賛歎したる者なり。

致虚守静で。物の復するを觀ると云ふこと。譬へを擧げていはゞ。漢の文帝の時。千里の馬を獻ずる者あり。文帝之を無用の物なりとして受け玉はず。是より物を獻じて上に媚を求むることやみたり。齋夫の官辯舌を逞しうして。上の意を迎へたれども。賞し玉はず。是より上に取入る事をする者なし。吳王濞謀反の志ありて。入朝せざりしを。咎めずして。却て几杖を賜ひたる故に。反謀自から止みたり。張武が賄賂を受けしことを咎めずして。却て金錢を賜ひたれば。百官の賄ひを受ること。自から止みたり。是等の處。賞すべくして。必しも賞せず。罰すべくして。必しも罰せず。唯虚静にして。人の心を静めたるなり。是文帝の老子を好み玉ひし處なり。但し此趣意は。人君に限らず。平人の上にもあることなり。譬へば。醉狂人ありて。我に種々の無禮をなすことありとも。我より相手にならざれば。自然と静まるなり。是虚静にして復を觀るの理なり。もし醉狂人を相手として。爭論に及びたらば。いはゆる不知常妄作凶と云ふものなり。是は凡人と雖も。心付くことなり。達人よりみれば。世上有爲の人は。皆醉狂人の如し。我心を動かして相手になるは。愚の至りと思ふことなり。某禪師山中に菴を結びたるに。鬼魅多くして。種々の畏ろしきことをなして。禪師を恐したり。然れども禪師安然としてありしに。後は鬼魅自から退きて。障礙をなすことなし。人禪師に問ふ。如何なる術を以て。鬼神を退治し玉ふや。禪師答へて。我に術なし。唯空を以てするのみ。山鬼の伎倆は。盡くることあれども。老僧の一空は。盡くることなしと云へり。禪師の空。即ち老子の虚静觀復の義なり。

### 希言自然章

#### 希言自然

此章は。已むことを得ずして。唐亂の朝に立つ時の心得を云ふなり。希言とは。言希なるなり。亂朝に立つて多言なるは。禍を招くの道なり。唯言少なくて居れば。自然と事の落着あるなり。多言にして急に事をせんとすれば。必ず誤る。自然の成り行きに任するがよきなり。

飄風不終朝。驟雨不終日。孰爲此者。天地。天地猶不能久。而況於人乎。

自然の成り行きとは。譬へば飄風はつちまき風なり。驟雨は夕立ち雨なり。此二つは。勢の厲しき者なり。其起りし時は。天地も震動する程のことなり。然れども一朝か一日の内には静まるなり。總て常理に反したることは。久しく續かぬ者なり。況んや人のすることに於てをや。暴亂の行ひをなす者は。久しからずして自滅するなり。其期を知らずして。言論の上にて。急に是を改めんとすれば。必ず禍を取るなり。

故從事於道者。道者同於道。德者同於德。失者同於失。同於道者。道亦樂得之。同於德者。德亦樂得之。同於失者。失亦樂得之。

夫故道を守る者は。強ひて上の仕方に逆らふことはせぬなり。上たる人道德に叶ひたることをすれば。それと同意するは勿論なり。道德を失ひたる事ありとも。先づ同意の形ちをなすなり。然れども。惡事の繁昌する勢ひ。恰も飄風驟雨の如くにして。暫時に止むなり。其時に始めて強ひて諫言などせざりしことを。人皆合點するなり。

信不足者有不信

右のこと。必竟は其人に忠信の意満足する故に。傍より見る人も。彼れは諂諛を以て身を立つる者と思はぬなり。もし我信足らずして。濁亂の朝に立ち。此の如くならば。いか程多言にして。申譯をなすとも。人承知せぬことなり。

此章の主意は。唐の狄仁傑のことを。譬へとすれば。能く通ずるなり。仁傑は一生則天に仕へたる人なり。則天一淫亂の女子を以て。唐の社稷を顛覆し。國號を周と改め。李姓を武姓にかふるに至る。然れども。時の勢ひ如何ともすべからず。仁傑則天に仕へ。宰相となり。言聞かれ。謀用ひられ。唐室を再興する志あれども。果さずして没したり。其後仁傑が薦め置きたる諸臣。則天が老病の時を伺

ひ。之を廢して。唐室を再興したり。後世仁傑を唐の忠臣と稱し。間然する者なし。若し他人ならば。如何ぞ後世の譏を免れんや。是を以て君子の道。忠信を尊んで。多言に在らざることを知るべし。凡そ大臣或は賢人など。亂朝に立つて。忠直の道足らず。諫言すべきことを黙する人多し。よく此意を知つて。妄りに批判を加ふべからざる者なり。

將欲喻之章

將欲喻之。必固張之。

此章は。暴國惡人などを平げんと思ふ時の仕方を云ひたるものなり。此二句は。弓の事に譬へていへり。喻はゆるむるなり。強弓ありて。少し之をゆるめんと思はゞ。常々はりつめて置くなり。左すれば。自然とゆるむ様になるなり。人事を以て云へば。越王勾踐吳に事へたる時。吳より齊を伐たんとす。勾踐加勢の兵をさしむけ。共に齊を打破り。其上にて吳の疲れたる處を襲うて。之を破れり。一旦齊に勝たしめて。其勢をはり。而して後に打破りて。之をゆるめしなり。必固とは。彼方より望ま

將欲弱之。必固強之。

相手勢ひ強くば。尙々つよらせ置いて。其上にて弱むべしとなり。譬へば。趙の李牧が北邊を守る時。匈奴來り攻むると雖も。敢て戦はず。専ら柔弱の體を示し置きて。彼方に驕らせ。其上にて大に打破

りし類なり。

將欲廢之必固興之

廢は横に倒す心なり。相手を倒さんと思はば。一旦はわざと是を立て置きて。其上にて倒すべしとなり。晉の桓玄が帝位を奪はんとするとき。其一族より其事を劉裕に問うたりしに。劉裕之を勧めたり。桓玄已に帝位を篡ふに及んで。劉裕兵を起して之を打亡ぼしたり。是桓玄帝位を篡ふ時は。其惡已に盈ちて。亡し易きことを知りてなり。

將欲奪之必固與之

向ふの物を奪ひ取らんと思はば。一旦此方より與へ置くべし。譬へば。知伯が土地を韓魏兩家に求めし時。兩家より地を割いて與へ置き。其後趙と力を合せて。知伯を打亡し。其土地を三つに分ちし類なり。

是謂微明

微はかすかなり。明は光りなり。敵を亡さんと思ふ本意を包み隠して。あらはさぬ處を。光をかすかにすると云ひたる者なり。

柔之勝剛 弱之勝強 魚不可脫於淵 國之利器 不可以示人

人

前に述べたる所は。柔を以て剛に勝ち。弱を以て強に勝つの方なり。何故に柔弱を以てするぞと云ふに。其譯は。譬へば。魚は淵の深き所に居て。形を人に見せぬ様にすべし。若し淵よりぬけて淺き所に來り。形を見らるれば。人に取らるゝなり。國にも利器と云ふものあり。利器は。刃の事にて。人を殺す器なり。此利器は。猶魚の如し。其ありかを人に知らしむべからず。人に知らしむれば。人を奪ひ取つて。却て我を殺すに至る。信長が明智を殺す意ありしに。明智之を悟りて。却て信長を弑するの類なり。故に利器を人に見せぬ仕方。即ち前の微明の術なり。

此章の主意は。老子平生無爲にして。天下の先とならず。故に惡人暴國を退治するにも。此方より手を出さず。相手の自滅するを待つなり。後人此章を陰謀の言なりとて忌嫌ふは誤れり。老子の本意は。なるだけ人にも我にもきすの付かぬ様にして。取治めんと思ふより。此工夫に及びたるなり。孔子の臨事而懼。好謀而成すと宣ひしに叶へり。伯夷の武王の紂を伐ち給ふを諫めしも此意にて。紂が自滅するを待給はば。刃に血をぬらさずして。天下は定まるべしと思ひたるなり。武王之に従ひ給はざりしゆゑ。牧野の戦に。流るゝ血杵を漂はすに至れり。先儒の伯夷少し老子に似たりと評せしも。此等の處なるべし。總じて老子の學は。虚より實を生じ。無より有を生じ。柔を以て剛にかち。弱を以て強にかつを主意とせり。八十一章すべて同様なり。人虚無と云ふことを解しちがへ。一概に其心を死

灰にし。其形を槁木にすることのみ心得たるゆる。此章に至りて疑ひを生ずるなり。

### 聖人無常心章

聖人無常心。以百姓心爲心。

常心とは。定まりたる心なり。是は好む。是は惡むと。定まりたることはなく。天下の人の好むことを好み。惡むことを惡む。是百姓の心を以て心とするなり。

善者吾善之。不善者吾亦善之。得善矣。

是より以下は。百姓の心を以て心とする處を云ひたる者なり。善者ありて善事をなせば。吾之を善とするは勿論なり。不善者ありて。吾に向つて惡事をなす時。吾亦之を拒まずして。矢張善者同様のあしらひにするなり。此の如くすれば。後は不善者も恥入りて。惡をせぬ様になる。是不善者をして善を得しむるなり。善不善を擇ばず。同じあしらひにする處。常心なき所なり。

信者吾信之。不信者吾亦信之。得信矣。

此も前と同じ道理なり。信者を信とするは勿論なり。不信者ありて。吾を欺く時。矢張これを信にして引受くるなり。此の如くすれば。氣の毒に思ひ。後は詐を云はぬ様になる。是不信者をして信を得しむるなり。

聖人之在天下。惴惴爲天下渾心。

惴々とは。落付かぬ貌なり。心を渾するとは。善惡信不信を差別する心のなき様に。一つに渾合するなり。もし差別の心ありはせぬかと。氣遣ひてをる處を形容して。惴々と云ひたる者なり。

百姓皆注其耳目。聖人皆孩之。

百姓みな我は善をなし置きたり。我は惡をなし置きたり。我は信を云ひ置きたり。我は虚を云ひ置きたり。上より如何賞し給ふや。如何罰し給ふやと。各耳を付けて上の言を聞き。目を付けて上の所作を見る。然れども聖人の心にては。皆之を孩兒にしてあしらひ給ふ。孩兒のすることには。善惡も信僞もなければ。唯一様にあしらひて。是を育するまでなり。此章の主意。國を治むるに。善惡信僞を精しく差別すれば。限りなく繁雜になるゆる。大抵にして置くがよしと云ふ心なり。ケ様の處。人の疑ふ所なり。惡をも善とし。僞をも信として。之をあしらひても。若其者が改めずば。如何せんと思ふ。其れは物の數に暗きなり。人の惡事は。制禁しても。する丈けはするものなり。亦制禁せずとも。止まる時は止まる。譬へば。商人の物を賣るは。始めより價を定めて債をとるなり。然れども時によかりては。代錢滞りて損失をすることあり。醫師の藥を施すは價を論せず。謝儀を持ち來る時。多も少も同じ挨拶にて受納するなり。然らば一向に謝儀を贈らぬ者多くなりて。醫師は相立たぬ筈なれども。左様にはならぬ者なり。買物の價を償ふ者も。醫師に謝儀を贈る者も。同じ人なれども。向ふよりの

あし、らひが違へば。此方の仕方、も亦異なり。是を以て國を治むる者の。善惡を差別し。賞罰を分明にするは。第一義の事にあらずと云ふことを知るべきなり。

### 天下有始章

天下有始。以爲天下母。

此章は。首章の無名天地之始。有名萬物之母と云ふことを申ねて言ひたるなり。始とは無なり。一切の有を生ず。是天下の母なり。

既得其母。以知其子。既知其子。復守其母。沒身不殆。

道を學ぶ人は。先づ無と云ふ者の大切なることを知り。是を手に入るゝ様にするなり。左すれば一切の有は。皆無の子となることを知るなり。其上にて。有に流れず。本の無に立ち反りて。之を守るを善とす。此の如くなれば。終身殆きことはなきなり。譬へば樹木の根柢と枝葉とあるに。枝葉は根柢より出づると云ふことを知れば。専ら根柢に培ふなり。左すれば。枝葉はそれに随つて繁榮するが如し。

塞其兌。閉其門。終身不勤。

是は知子守母の仕方を云ひたるなり。兌は口なり。口を塞ぐとは。口を塞ぎて言はぬなり。いはゆる不言の教なり。門は事の出づる處なり。門を閉づるとは。事を閉ぢてせぬなり。いはゆる無爲の事なり。此の如くすれば。安樂無事になりて。終身勤勞することはなきなり。是即ち無を守るなり。

開其兌。濟其事。終身不救。

是は母を守らぬ害を云ふなり。口を開くは多言なり。事をなすは。有爲なり。此の如くなれば。事より事を生じ。終身勞苦に陥りて。救ふべからず。

見小曰明。守柔曰強。

是は塞兌閉門の仕方を示したるなり。凡そ如何なる大事も。其始めは皆無事なり。事の小さな時に早く其手當をして。大事に至らぬ様にする。是未然を察するにて。智の明かなる所なり。又堪忍を第一として。人より無理を仕かけたりとも。立腹せず。柔順にして居る時は。事は起らぬ者なり。其堪忍強き處が。眞の強きと云ふ者なり。見小の明と。守柔の強とを以てする時は。事の起るべき所も。無事にて濟むなり。

用其光。復歸其明。無遺身殃。是謂襲常。

光と明とは。智を形容したる言なり。光は外に輝きたる處にして。智の用なり。明は内に明かなる所にして。智の體なり。道を知る人は。智を外に顯はさずして内に隠す。内は本なる故に。復歸と言ひ

たるなり。是乃ち知子知母の義なり。此の如くなれば。終身不殆して。身に殃禍を遺すことなし。嬰はつゝみ藏すなり。常久の道を身に藏する故に。一切の危難を免るゝなり。

知子守母と云ふことを。事を擧げていは。上古の時は。刑罰と云ふこと無かりしなり。人の子を殺せば。人亦其子を殺す。人の妻を奪へば。人亦其妻を奪ふ。何事も相對にて濟すなり。是刑罰の本にして。即ち母なり。聖人出づるに及んで。始めて五刑の法あり。一切の事。相對にすることを禁じて。上よりの裁斷に任するなり。是相對の反報より出でたることなれば。即ち子なり。國を治むる人。上古は刑罰なくして治まりしと云ふことを知れば。刑罰をも餘り繁雜にすることなくして。下より訟へ出でたることは。之を擲き。内濟する時は。大抵の事は知らぬ顔にて過すなり。是を子を知つて母を守ると云ふなり。もし母を守るの義に暗き時は。下は内濟せんと思へども。夫にては上の法度立たぬと云ふことになりて。聊の事も穿鑿さびしくなり。後は秦の苛法と云ふ様なる事になり行くなり。始皇帝は。早朝より夜中まで。政事を擲きても事すまず。秤を以て願書をかけて。一日何斤づゝと定めて。事を決し給ひしなり。是則其免。濟其事。終身不救と云ふものなり。

他事も之に準じて知るべし。古の時は葬禮と云ふことはなく。死する者をば野に棄てしなり。一變して之を地に埋むる様になり。又變じて棺を作り。又變じて槨を作り。又變じて明器を作る。其後は段々美麗を極め。穴の中に城郭宮室を構へ。數百人を殉葬するに至る。秦の亂などは。始皇墓所の公役多きより起れり。其他大牢八珍は。饑を療するより起り。瓊樓金闕は。風雨を掩ふに始まり。黼黻文

章は。身を包むに始まり。三千の宮女は婚姻して子孫相續するに始まる。何事も母を忘れて子を守り。本を捨て末に趨るより。奢靡に流れ。繁雜に成つて。終に天下の困窮となるなり。此章の旨深いかな。

老子摘解卷上終

# 老子摘解卷下

## 以正治國章

以正治國。以奇用兵。以無事取天下。

國を治むるには。正を以てして。奇を以てせず。兵を用ふるには。奇を以てして。正を以てせず。此二句は。物事各其宜しき處あるを云へり。天下を取るに至つては。無事を以てすべくして。多事を以てすべからず。是其宜しき處なり。上の二句は。古今の通例にて。人人の周く知る所なり。無事の一句は。人の知らざる所なり。故に人の周く知る所を引て。其知らざる所を喻したる者なり。老子の主意は。全く下の一句にあり。この取ると云ふは。攻め取り奪ひ取る事に非ず。只人の心を此方へ懐けて。思ふとほり治むるを云ふなり。

吾何以知其然哉。以此。

此句は。無事を以ての一句を受けて云ふなり。天下を治むるには。無事でなければ。できぬと云ふは。此譯を以てなり。此とは。下に云へる四ヶ條の事をさすなり。

夫天下多忌諱而民彌貧。

是より以下は。多事の惡きことを擧げたるなり。忌諱とは。忌み嫌ひなり。方角時日などの吉凶を詳にするを云ふなり。不吉を忌み嫌うて。之を避くるは福を得んが爲めなるに。却て貧乏になるなり。一事を擧げて云はば。家相を論ずる者は。ありきたりの家をうちくづして。建てかふることあり。其物入り身代にさはるに至る。是福を求めんとして。却て財を損するなり。

人多利器。國家滋昏。

利器とは。便利なる道具なり。昏とは。物がわからぬ様になりて。くらやみになると云ふことなり。譬へば。轎と云ふものは。便利なる者なり。是を始むれば。武士なども。馬に乗ることを休めて。轎にのる様になる。さすれば。馬術すたりて。國の武備が昏くなるの類なり。

民多技巧。奇物滋起。

技巧とは。細工をよくすることなり。奇物とは。正しからざる者なり。譬へば。細工を上手にする者多ければ。賈金賈札などを自由にこしらふる様になる。是奇物滋起るなり。

法令滋彰。盜賊多有。

法令は惡を禁ずるためなれば。夫を明白にしたらば。盜賊などは絶ゆる程にもあるべきを。却て多くなるなり。譬へば。博奕の制禁きびしければ。今まで博奕をせし者ども。渡世の仕方なくて。みな盜賊になるなり。

以上の四ヶ條。皆國を治むる人が。よしと思つて始めたる事なれども。却て害になる事あり。是にて。多事は無事に如かずと云ふことを知るべしとなり。

故<sup>ニ</sup>聖人云<sup>フ</sup>。我無<sup>ク</sup>爲<sup>ス</sup>。而民自化<sup>ス</sup>。我好<sup>シ</sup>。靜<sup>シ</sup>。而民自正<sup>シ</sup>。我無<sup>ク</sup>事<sup>シ</sup>。而民自富<sup>ム</sup>。我無<sup>ク</sup>欲<sup>シ</sup>。而民自樸<sup>シ</sup>。

こゝは無事を以て天下を取ると云ふことを。古聖人の言を引て。證據としたるなり。聖人とは黄帝などの類なるべし。下の四句は。大抵同意なり。爲化靜正事富欲樸と韻を合せて。少しづつ辭をかへたる者なり。大意。上たる人は。只無事にしてをれば。自然に治まると云ふことを明かしたる者なり。天下を治むるに。無事を以てするは。老子の常言なれども。此章は。四ヶ條の事を擧げたる處。主意なり。此四ヶ條は。眼前にあることにて。常人も心付くことなり。夫を擧げて。無事の貴きことを知らせたる者なり。

### 其政悶々章

其政悶々<sup>ク</sup>。其民醇々<sup>ク</sup>。其政察々<sup>ク</sup>。其民缺々<sup>ク</sup>。

悶々とは。ふさはげにして。黑白のハキとせぬ様子なり。醇々とは。あつきなり。察々とは。黑白分明なるなり。缺々とは。かけたることありて。たらぬ様子なり。言ふこゝろは。政事の仕方。ふさはげにありては。悪しき筈なれども。民の風は。却てあつくなり。政事のさばけすぎたるは。よき筈な

れども。事多くなりて。却て民がてたらぬ様になるなり。

禍兮福所倚<sup>ル</sup>。福兮禍所伏<sup>ス</sup>。孰<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>其極<sup>ヲ</sup>。其無<sup>レ</sup>正<sup>キ</sup>耶<sup>カ</sup>。

此四句は。悶々の察々に勝ることを云はんとて禍福の上に就て。其理を論じたる者なり。禍兮福所倚とは。禍は人の嫌ふ處なれども。却て福は夫によりかゝりてあるなり。譬へば。勾踐が會稽に苦みしは。禍なれども。夫より忿激して覇業をなす様になれり。又福は人の好む處なれども。其中に禍が伏し隠れてあるなり。譬へば。夫差が勾踐に勝ちたるは。福なれども。夫より驕を生じて。遂に滅亡に至る。極とは。動かぬことなり。正とは定まりたるなり。いづれ定まりたることはなきならんと云ふ心なり。四句の大意は。禍福は定らぬ者なり。悶々たる者は。格別に福を求めず。禍を避くることも少し。夫が却て仕損じ少きなり。察々たる者は。禍を避けて福を求むることを。專一にする故。仕過し出来て。却て宜しからぬと云ふ心なり。

正復爲<sup>レ</sup>奇<sup>ト</sup>。善爲<sup>レ</sup>妖<sup>ト</sup>。民之迷<sup>ハ</sup>。其日固<sup>シ</sup>已久<sup>ク</sup>矣<sup>ナリ</sup>。

此四句は。善惡の定らぬことを云ひたるなり。もと正しと思つてせしことが。却て奇となる。奇は正しからぬなり。もと善と思つてせしことが。却て妖となる。妖も奇性にしてあしきことなり。譬へば。上章に云ふ。法令を正しくするは。正なり。善なり。然れども。夫より盜賊を生ずるは。奇なり。妖なり。銀札をつくるは。民を利する爲めにて。正なり。善なり。然れども。賈せ札が繁昌し。又は國



に正錢が少なくなるは。奇なり。妖なり。民がよきと想うてしたることが。變じてあしきことになる故。いづれに向ひて行て宜しきやらんと。方角に迷ふことが久しきなり。此四句は前の禍福の道理にて。悶々とあれば。善惡をあまりわかたぬ故。却てよし。察々とあれば。夫をわけ過す故に。却て惡しと云ふ心なり。

是以聖人方而不割

是以とは。禍福邪正は。定まらぬと云ふ故を以てなり。聖人の事を行ふは。四角にはあれども。刀にて切りたる様に。四角すぎはせぬなり。

廉而不刺

廉はかどひしのあるなり。刺はやぶり傷くるなり。かどひしあれども。餘りかどたちすぎて。それに觸れたる者は。傷がつくと云ふほどにはせぬなり。

直而不肆

直はすぐなるなり。肆はのぶなり。すぐにはあれども。竹竿などの様にて。向へのふれば。物をつく様にはなきなり。

光而不耀

光りはあれども。行燈の中の火の如し。外に蔽ひある故。耀き過ぎて人のまばゆき様にはなきなり。

方而不割以下の四句。皆一意なり。禍福邪正は。定まりなき者なれども。一向にそれを分たぬことはならぬ故に。方と云ひ。廉と云ひ。直と云ひ。光と云ひ。いかにも。禍は禍。福は福。正は正。邪は邪と。理の當然を以て。さばきをつくる處なり。不割不刺不肆不耀とは。福の中に禍あり。正の中に邪あることを知りたる故。格別にさばきをつけ過さず。物事七八分にして置くなり。かくの如くするを。傍より見れば。ゆき届かぬ様に見ゆる。即ち悶々なり。夫が實は政事の上手なり。此章の趣意を。醫事に譬へて云は。上手の醫者は。痼疾沉痾などを治するには。餘り劇劑を用ひず。また疾をも七八分なほして悉くは治せず。故に白人より見れば。療治が手ぬるき様に見ゆ。然れども疾の悉くは除き難きことを知りて。左様にする。是が上手の處なり。未熟の醫者は。病の淺深。體の強弱を論せずして。病とさへ云へば。一概に是を攻むる故。或は病愈えて體つき。或は病愈えて。又別に一病を生ずるなり。是が悶々と察々とのちがひなり。老子の言は。誠に老功の言なり。未熟の徒の知る所に非ず。

天下皆謂我章

天下皆謂我大似不肖

天下の人が。老子を評して。廣大なる人なれども。不肖に似たりと云ふ。不肖とは。似すと訓じて。取締りなく。ケ様にあると。物に譬へて云はれぬなり。俗にハツとした人と云ふが如し。

夫惟大<sup>ナリ</sup>故似<sup>ニ</sup>不肖<sup>ニ</sup>。若肖<sup>バ</sup>久<sup>シ</sup>矣其細<sup>ナルコト</sup>。

是は老子より。人に申し譯をしたる言なり。世人の申す所は。大なる處はよしと雖も。不肖なるがあしと云ふ心なるべけれども。大にあれば。是非とも不肖に見ゆるなり。もし物に譬へて言はれる様になりては。とくより細きことになるなり。

我有<sup>ニ</sup>三寶<sup>ニ</sup>。寶<sup>トシテ</sup>而持<sup>ツ</sup>之<sup>ヲ</sup>。

是より以下は。人が老子の道のハツとしたる所に困るゆゑに。形容を設けて。其方角を合點する様に云ひたる所なり。吾道を知らんと思はゞ。我に三つの寶あり。其譯を知りたらば。目印しが出來て。取つき處あるべしとなり。寶而持之とは。老子平生此三つを大切なる者にして取はづさぬ様にして居るとなり。

一<sup>ニ</sup>曰慈<sup>ト</sup>。二<sup>ニ</sup>曰儉<sup>ト</sup>。三<sup>ニ</sup>曰不敢爲<sup>ニ</sup>天下<sup>ノ</sup>先<sup>ト</sup>。

三寶の第一は。慈悲なり。慈悲とは。親の子を育つる如く。善人惡人の差別なく。一切之を育てて。疵をつけぬ様にすることなり。二には儉約なり。儉約とは。財用に限ること、非ず。成る文言ふことも爲すことも。少なき程をよしとするなり。三には。人より先きに事をせぬなり。何事も人の思ひ立ちたる上にて。夫に従うて事をするなり。天下とは。一切の人と云ふが如し。此三つの處より。老子の道を學びなば。其方角がわかるべし。

慈<sup>ナルガ</sup>故<sup>ニ</sup>能勇<sup>ナリ</sup>。

是より三寶の機能を述べたるなり。慈悲にある故に。強敵にも能く勝つ。これ勇なり。漢の高祖の寛仁を以て。項羽が強暴なるに勝つゝの類なり。

儉<sup>ナルガ</sup>故<sup>ニ</sup>能廣<sup>シ</sup>。

儉約にある故に。施しが廣く一切に及ぶなり。漢の文帝の百金を惜みて。露臺を作り給はざりしかども。天下の民には。しばしば租税を免し給ふの類なり。

不<sup>ニ</sup>敢爲<sup>ニ</sup>天下<sup>ノ</sup>先<sup>ト</sup>。故<sup>ニ</sup>能成器長<sup>ト</sup>。

成器長とは。一器量ある者の頭なり。漢高祖國を治むることは。蕭何に委ね。謀略は。張良に問ひ。合戦は。韓信に任せて。自己の了簡を用ひざるの類なり。

今捨<sup>テ</sup>慈<sup>ヲ</sup>且勇<sup>ニ</sup>。捨<sup>テ</sup>儉<sup>ヲ</sup>且廣<sup>ク</sup>。捨<sup>テ</sup>後<sup>ヲ</sup>且先<sup>ニ</sup>。死<sup>セン</sup>矣。

こゝは三寶を用ひざる者の害を云ふなり。且とは。先づと云ふ心なり。慈悲をさしおきて。先づ最初より勇をすれば敗る。項羽が如き者は是なり。儉約をさしおきて。最初より手廣くせんとすれば。窮乏に至る。漢の武帝の如き者は是なり。人に後れずして。最初に事を仕始むれば亡ぶ。陳涉吳廣が如き者は是なり。品はかはれども。孰れも死亡を取る仕方なり。

夫慈以戰則勝。以守則固。天將救之。以慈衛之。

こゝは又慈の機能を。くりかへして云ひたる者なり。三寶を残らすいへば煩はしき故に。第一の事を舉げて。餘の二つを略せしなり。慈と云ふこと他事にはよしといへども。戦闘の上には。用ひ難しと思ふ人あり。是然らず。以戦則勝とは。仁を以て不仁を伐つゆゑに必勝なり。以守則固とは。我士卒みな仁恩に懐きたるゆゑ。籠城しても。二心なく守るなり。慈を以て身を守る者は。假令敗北することありとも。大方は天の救ひがある者なり。故に滅亡するに至る氣遣ひなしとなり。

或問て曰。老子は。道可道非常道と云うて。仁義孝悌等の名目を捨て。專無名を貴ぶ。然るに今三寶の名を立て。人を教ふる者は。何ぞや。答へて曰。三寶と云ふこと。實に其名目あるに非ず。只一箇の無の字を形容したる言と知るべし。只無を守りてさへをれば。自然と物を害ひ傷くることなし。其處々慈と云ひたるなり。無を守れば。多事ならず。多慾ならず。故に自然と儉になり。無を守れば。事を思ひ立つことなく。自然と人の後になる。始より三ヶ條と立て。之を守るにはあらず。然るを賢として之を持すると云ひしは。人不肖に似たりと云ひし故に。已むことを得ずして其方角を知らせたる者なり。讀者辭に泥むべからず。

善爲士者不武章

善爲士者不武。

此章は。不爭の徳を明かにせり。士は武を貴ぶ者なれども。善き士に至りては。武猛には見えぬなり。韓信が胯下をくゞりても。劍を抜かざりしが如し。

善戰者不怒。

戦ひは怒りを主とする者なれども。上手は然らず。司馬仲達が孔明より巾幗を贈りて辱められたれども。終に怒らずして戦はざりしが如し。

善戰者不與。

與するとは。相手になるなり。梁より趙を圍む時。孫子齊の將となりて趙を救ふに。趙に趨かずして梁を襲ひたれば。趙の圍は自ら解くるの類なり。

善用兵者爲之下。

漢の高祖の我不如蕭何。不如韓信。不如子房と云ひて。三傑を用ひ給ひしが如し。

是謂不爭之徳。

是をとほ。以上の四ヶ條を一つにして言ひたるなり。一言にいへば。皆向の人と不爭して之に勝つる法なり。

是謂用兵之力。

又其上にもいへば。己が力を用ひずして。人に骨折らせて功を立つる仕方と云ふものなり。  
是謂配天。

尙も其功を賛していはば。天の萬物を主宰し給ふ妙所に配合して同じことなり。

### 古之極也。

こゝは古聖人極意秘密の傳なり。反す反すも賛歎したる辭なり。  
用入之力と云ふこと。人を用ふるに限らず。合戦の時も。敵より戦ひを挑めども。固く守りて戦はざれば。彼自ら疲るゝなり。其疲れを伐てば勝ち易し。是敵に力を用ひさせて。敵に勝つことなれば。敵の力を我方に用ふる道理なり。是老子秘訣の處なり。堯舜此秘を得給ふ故に。垂拱して天下治まり。孔子此秘を得給ふ故に。不憤不啓。不悱不發して。三千弟子の才徳を成就し給ふ。造化此秘を得る故に。無爲にして四時行はれ。百物生ずるなり。故に古之極也と賛歎せし者なり。

### 出生入死章

出生入死。生之徒十有三。死之徒十有三。民之生動之死地。亦十有三。夫何故。以其生々之厚。

此章は。世人長生を貪りて。却て其壽命を損するの惑ひを解きたる者なり。出生入死とは。人間一生。

生の朝より死の夕に至る迄を束ねて云ひたるなり。生を出て死に入るは。誰も同じことなれども。其中に養生の道理に叶ひたる行ひの者。十にして三なり。是は惡をせず。不養生なることを慎む類なり。長生の道に叶ひたる故。生の徒なり。又生の欲を恣にし。不養生或は惡業をする者十の三。是は死の徒なり。又長生をせんと思ひ。種々の道を盡すと雖も。善と思ひしことが。却て惡となり。養生が却て不養生となり。其命を縮むる者あり。是亦十の三なり。生々とは。吾身を養ふことなり。厚とは。念が入り過ると云ふ心なり。此章の意は。生の徒死の徒と分けたるは。誰も知ることなり。唯生々の厚き故に。命を縮むと云ふこと。人の心付かぬ處なり。生の徒死の徒は客なり。生動もすれば死に之くと云ふこと。此章の主意なり。

蓋聞善攝生者。陸行不遇兕虎。入軍不避甲兵。

吾聞くところを以てすれば。上手に養生をする者は。山中に獨行したりとも。兕虎の如き猛獸に出合ひ。傷けらるゝ氣遣ひなし。又軍中矢石の中に入りたりとて。傷けらるゝことなし。夫故甲兵を避くる用心に及ばぬなり。

兕無所投其角。虎無所措其爪。兵無所容其刃。

其故は。兕も角を以てつくべき場所なく。虎も爪をうちかくる所なく。兵も刃を用ふる所なし。夫故何の氣遣ひにも及ばぬなり。

夫何故。以其無死地焉。

同じく肉身なるに。左様のことに逢ふ氣遣ひなしとは。何を以て知るや。畢竟死地と云ふ者なき故に。一切の心遣ひに及ばぬなり。死地とは。人の生死は。皆吾身に兼ねて所持したる場所あり。生には生の地あり。死には死の地あり。人によりて異なるなり。凡そ死する者は。皆死すべき場所を我身に所持してあるなり。故に時節到來すれば。是非とも死を免れず。生地を所持したる者は。死する氣遣ひなし。故に危き場所に臨みても。氣遣ふことはなきなり。譬へば。疫癘など大に行はれたるに。十人に八人死し。二人は何の病もなし。是八人の者は死地あり。二人は死地なきが故なり。凡人の目で見れば。生地死地は事の迹より見るに非れば知り難し。有道者の上にては。至つて明かに見ゆる故。用心するにも及ばぬなり。其故は。生死皆數あり。數満ちて而して死す。有道者は兼ねてより數を見透したり。夫故とても死の到來する時節は。當分はなきと云ふことを。明かに悟りたる故。騷がぬなり。古人の身分に譬へて言はゞ。柳下惠が魯に居り。蘧伯玉が衛に居り。晏平仲が齊に居り。季札が吳に居り。張良が漢に居るの類是なり。爭奪變化の間に居り。衆人皆危めども。己は晏然としてあるは。我に死地と云ふ者なきことを。自ら知りて居るなり。是衆人の目にかゝらぬことにて。知者獨り知るの境なり。老子の意深いかな。

治人事天章

治人事天莫如嗇

是は老子の道に。一字の秘傳あることを云へり。治人事天とは。帝王の業をさしたるなり。帝王の職は。下は下民を治め。上は上天に事ふるなり。王者の道。唯嗇の一字緊要なり。嗇とは。即ち吝嗇の字なり。然れども財用のごとは主に非ず。萬事に付け。儉嗇なるを善とす。事をするも。言を言ふも。一切のこと。是を惜みてせぬ様にする。是が嗇の理なり。

夫唯嗇。是以早復。

嗇を尙ぶゆゑんは何ぞや。人は氣に因つて立つものなり。草木の根柢あるが如し。多事の人。氣を勞すること強き故。元氣早く衰ふるなり。譬へば。草木を朝暮に植ゑ易ふるが如し。氣と體と離れて枯るゝなり。枯れざるも亦傷む。嗇にして居れば。元氣動かす。一旦元氣衰へても。元の通りに復るなり。夫故。氣が丈夫になりて。妄に動かす。

早復謂之重積德

元氣早く復すれば。其後氣を損することをせず。故に氣が段々積み重なるなり。氣は即ち徳なり。一切の事の本となる。故に是を徳と云ひたるなり。

重積德則無不克

克せざることなしとは。如何様のことに差向けても。少しも退屈することなし。氣を能く煉りたる者

は。久しく食はずとも。餓うることなし。寒中にも。衣服を假らずして凍ゆると云ふことなく。或は水火に投じ。兵刃にかゝりても。亦傷くことなし。是を無不克と云ふなり。

無<sup>ケレバ</sup>不<sup>レ</sup>克<sup>セ</sup>則<sup>シ</sup>莫<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>極<sup>ヲ</sup>可<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>有<sup>ル</sup>國<sup>ヲ</sup>。

莫<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>極<sup>ヲ</sup>とは。長壽なるを云ふ。此の如くなれば。其身をたもつのみならず。國家も亦たもつ可し。凡そ國家をたもつは易く。身をたもつは難し。既に能く長壽無涯なれば。其道理を以て國家をたもつは。一層易きことなり。

有<sup>スレバ</sup>國<sup>ノ</sup>母<sup>ヲ</sup>可<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>長<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>。

肉身さへ堅固にして。數百年を経る。況や國家をや。人をして壽ならしむるは氣なり。此氣と云ふ者。一切の物を生ずる故。是を母と云ひたるなり。身に在つては身をたもち。國に在つては國をたもつ。一切の母を我物にしたる者なり。

是<sup>ヲ</sup>謂<sup>フ</sup>深<sup>ク</sup>根<sup>ヲ</sup>固<sup>ク</sup>蒂<sup>ヲ</sup>長<sup>ク</sup>生<sup>ル</sup>久<sup>ク</sup>視<sup>ル</sup>之<sup>ノ</sup>道<sup>ナリ</sup>。

此畜の字より工夫すれば。氣に氣が積もりて。際限なきことになる。譬へば。金銀を使ふこと少なき程増長すれば。其富限なくなる道理なり。深根とは。草木の根を深く土に埋め置きて動かさぬが如し。固蒂は。果の蒂を固くし。其實を動かさず。烈風に逢ひても。落つると云ふことなし。皆元氣の本を深く養ひたることなり。是は元來長生久視の道なり。久視とは。一の物を終日見つめても。瞬せぬことなり。元氣満足する者。かくの如し。此所は。老子平日身に行うて。覺えのあることなり。因て其道を治國に施すなり。

此章は。老子は養生家にて。仙術を行ふ者の祖とする所なり。養生治國一理なり。因て今國家をたもつ者の爲めに。其法を説き。養生の理を以て。之を治國に施すなり。一部の中。其理處々に見えたり。唯此畜と云ふ一字は。其義極めて淺くして。平人も修行成就すべきことなり。故に之を釋す。我朝の江村專齋百歳の壽を保ちし人なり。後水尾天皇より養生の方を問ひ給ひしに對へて。臣平日の些の字を持するのみ。飯を喫するも些。言語も些。一切の作事も些。養生も亦些と對へたり。些の字。即ち畜の義なり。

### 天下有道章

天下有道。卻走馬以糞。天下無道。戎馬生於郊。

此章は。多欲の害を言ひたるなり。天下有道とは。明主上に在つて。諸侯各々の封疆を守つて動かざる時の事なり。かゝる時は。千里を走る駿馬ありと雖も。之を合戦に用ふること無きゆゑ。無用の物なり。故に之を卻けて田に培ふの用とするなり。天下無道にして。諸侯相争ふ時に至りては。郊野にある。農夫の馬までも。之を引上げて。戎兵の用にするなり。有道無道の差別は。他の事にあらず。己が分に安んじて無欲なると。人の物を我物にせんと思ふ多欲なるにあることなり。

罪莫大<sup>ナ</sup>於<sup>レ</sup>可<sup>キ</sup>欲<sup>ス</sup>。禍莫大<sup>ナ</sup>於<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>足<sup>コトヲ</sup>。咎莫大<sup>ナ</sup>於<sup>レ</sup>欲<sup>スル</sup>得<sup>ル</sup>。

此は上の戎馬生於郊と云ふを承けて言ひたるなり。諸侯より他國を伐つには。必彼方の罪を鳴らし。征伐するなり。然れども其實は罪あるに非ず。其土地を奪はんが爲めなり。土地と云ふ者は。人の欲する物なり。人の欲する土地を我所持したるが。即ち罪の種なり。又他國を侵して兵敗れ滅亡に至る者あり。是禍なり。咎なり。此禍と咎とは。兵の用ひ方が悪しきには非ず。元來己が國を持ちながら。夫を不足に思ひ。尙も隣國の地を我物にせんと思ふ欲心。即禍と咎との種なり。

故知<sup>ル</sup>足<sup>ル</sup>之<sup>ハ</sup>足<sup>ル</sup>常<sup>ニ</sup>足<sup>ル</sup>。

前の通りの譯ゆゑに。人は足ることを知るに如くはなし。人の欲にも大小あり。天下を得て足れりとするあり。一國を足れりとするあり。一家を足れりとするあり。是等の人は。皆己が望みありて。其望み満たざれば不足とす。但足ることを知る者は然らず。天子となれば。天下を以て足れりとし。士庶人となれば。一簞の食一瓢の飲を以て足れりとし。分に隨ひ。命に安んずる故に。多きも亦足り。少なきも亦足る。是を常に足ると云ふ。

此章は。深く人の欲を戒めたるなり。韓信彭越は。謀反にて誅せられたれども。實は謀反の罪は小なり。大國を領したる罪が大なる故に。削られたり。大國を領するは。罪には非れども。罪を得る根源は。此處にある故に。罪と云ひたるものなり。是罪莫大於可欲の義なり。又韓信が雲夢に擒にせられ。長樂に誅せられし禍咎は小なり。是は免るゝ仕方もあるべし。初め足ることを知らずして。齊に假王たらんことを欲せし禍咎は大なり。此一念滅族の根源にして。救ひがたき所なり。是を禍莫大於不知足。咎莫大於欲得と云へるなり。世人の罪禍を避くるは。其末に心を用ひ。老子は其本に心を用ひたり。是老子教を施すの深切なる所なり。等閑に看過すべからず。

吾言甚易知章

吾言甚易知<sup>リ</sup>。甚易行<sup>ヒ</sup>。天下莫能知<sup>ル</sup>。莫能行<sup>フ</sup>。

此章は。世上の人。老子の意を知るものなきを。感歎して云ひたるなり。吾言は知り易けれども。知る人なく。行ひ易けれども。行ふ人なし。難くして知らず行はざるは。是非もなし。易きことを知らず行はざること。實に歎息すべしと云ふ心なり。

言<sup>ハ</sup>有<sup>リ</sup>宗<sup>ト</sup>。事<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>君<sup>ト</sup>。夫唯無<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>。是以不<sup>レ</sup>我<sup>ラ</sup>知<sup>ラ</sup>。

此段は。易き事なれども。知る人の少なき所以を言ふなり。凡そ天下一切の言の中に。宗になる言あり。宗とは本家のことにして。主となるなり。一切の事の中に。君となる事あり。其譯を知る者なし。

老子は平日言の宗を云ひ。事の君を行ふ人なり。世人其所に目を附けず。故に老子の貴ぶ可きことと知らぬなり。言の宗とは何ぞや。不言の教是なり。事の君とは何ぞや。無爲の事是なり。我事あども言はず。人の言を以て言とす。此の如くなれば。言天下に益つれども。口の過ちなし。我事あれども爲さず。人の事を以て事とす。此の如くなれば。行ひ天下に益つれども。怨み悪まるることなし。此の如くなれば。逸ありて勞なし。功ありて過なし。是を言の宗事の君と云ふなり。

知我者稀。則我者貴矣。是以聖人被褐懷玉。

人の我を知らぬは。歎すべきことなれども。其實は知る者少なきが貴き道理なり。譬へば。夜光の珠も。家ごとに所持したる者ならば。石瓦も同然なり。世上になき者を。我のみ珍藏したる故に貴きなり。是を以て。昔の聖人も被褐懷玉人あるなり。褐は賤者の服なり。玉は徳に譬へたる者なり。被褐懷玉とは。貧賤に居て徳を包み隠したるを云ふ。傳説が胥靡となり。太公が漁父となる是なり。老子柱下の史となりしも。亦其心なり。

和大怨章

和ニシテ大怨ニツク必有ニハバ餘怨ニシテ安ニシテ可ニケン以ニテ爲ニス善ト

此章は。人と和合することを言へり。大怨とは。兼て其人に意恨あるなり。意恨ある者は。人取りあつかひて和睦する者なり。然れども表向きは和合しても。心の中には怨み残る。是人情なり。其通りにては。和睦も詮なし。和睦するからは。一向心に残ることなき様にある可きなり。

是以聖人執ニシテ左契ニシテ而不レ責ニメ於人ニ

左契とは。手形のことなり。凡そ古の時。物を假し借りするに。手形を以て證據とす。一枚の手形を中より二つに割り。其左を假し主此を藏し置き。右を借る者の方に藏して證據とす。是通法なり。左契を取つてさへ置けば。何時も催促して是を取るに。彼方より申分はなきなり。然るに聖人は。其左契を所持したるのみにて。用に立つることはなし。さきもとが損をかけたなりとも。夫をも寛恕して責むると云ふことはなし。俗に所謂證據がものをいふ時節はなきなり。是は財用假借の一事を以て譬へにするなり。聖人の仕方は。萬事其通りにて。此方にはいやおうならぬ理窟はあれども。夫を言ひ立てず。向ふの無理なる願をも其通にして置くなり。夫故意恨の残ると云ふこと決してなきことなり。

有徳ハ司リ契ヲ。無徳ハ司レ徹ヲ。

徹とは。證文の表によりて。理の當然に捌きを付くるなり。契を用に立つると立てざるとは。其人の徳義による。徳ある者は。契をなほしおきて用に立てず。是司契なり。徳なき者は。夫を取り出して。是非とも證文の表によつて取り計らふ。是司徹なり。

天道ハ無レ親ニ。常ニ與ニ善人ニ。

右の如くなれば。徳ある者は。證文を用に立てず。始終身の損をする譯なり。然れども左様の善人に



なりては。天道より其みかたをなさる故。運窮まりて行き仆れずると云ふことは。決してなきことなり。天は萬物の命を制する者なり。天道より御覽じて。其善人たることを。御推察ある故。萬事付て。天のたすけあるなり。夫故何にも心遣ふことはなし。此章の主意。物事を刻薄にするは。利勝手の様なれども。實は然らず。寛恕する程。却て運に叶ふ者なり。平人の身の上に。此の如き類極めて多し。聖人は之を萬事に用ひ給ふ故に。猶更其功德大なることなり。

### 小國寡民章

小國寡民。使有什伯人之器。而不用。使民重死。而不遠徙。

此章は。天下を治むることを云へり。言ふことろは。我をして天下を治めしめたらば。此の如くあらしむべしとなり。小國とは。國を小にするなり。寡民とは。民を寡くするなり。天下の治まり難きは。諸侯に大國ある故なり。我をして天下を治めしめば。諸侯の内に。大國を立てず。盡く其國を小にす可し。國小なれば。民もそれに從て寡くなるなり。什伯人之器とは。或は舟車。或は武器など。諸侯の所持せで叶はぬ道具をば。什人前か。佰人前か具へおけども。是も具へたるのみにして。用立つことはなき様にするなり。又民百姓の風俗。命を大切にすることを主意として。過分の望みをせず。故郷を去つて他國に往き。立身を望むなど云ふこと。かつてなき様にするなり。此三句、一章の大意なり。

雖有舟輿。無所乘之。雖有甲兵。無所陳之。使民復結繩而用之。

此段は。十百人の器あつて用ひすと云ふを承けて。之を釋したるなり。舟あり車ありと雖も。他邦に往くことなれば。之に乗るに及ばず。甲兵ありと雖も。合戦することなれば。之を陳するに及ばず。又昔は文字なくして。繩を結びて物事の心覺えにせし如く。文字書契をとり用ふるほどの。たちいりたることはなく。再び古昔の如く。繩を結びて。是を用ふる様にあらしめんとなり。

甘其食。美其服。安其居。樂其俗。隣國相望。雞狗之聲相聞。民至老死。不往來。

此段は。死を重んじて遠く遷らずと云ふを承けて。之を釋せり。甘其食とは。己が用ひ來れる蔬食を。天下の美食の如く思ふなり。是は世上に美食と云ふものあることを知らぬ故なり。美其服。安其居。樂其俗も。亦同意にて。疏服を美服と思ひ。不自由なる居室を朱門雕牆の如くに思ひ。田舎の風俗を都に勝る様に思ふ。皆世間の事を見聞せぬ故なり。鄰國相望。雞狗之聲相聞とは。至つて近き所を云ふなり。五町か三町の隔てにて。彼雞狗の聲も此に聞え。此の聲も彼に聞ゆる程にあるなり。然れども其中に生長する民。老死に至る迄。互に往來することはなきなり。是は何事も其地限りにて。用事辨ずる故に。自然と界より外へ出づることは無くてすむ様になるなり。

老子此書を著すこと。身を脩むる爲めのみに非ず。天下を治めんがためなり。故に一部の終りに至りて。道を以て天下を治むるの功用を形容して。人に示したる者なり。言ふこと。我をして天下を治めしめば。此の如くすべし。然らば當世の如く。文華なることもなく。又合戦争奪することもなくして。天下太平ならんとなり。小國寡民と云ふことを。古來より。試に小國寡民を得て治めたらばと云ふことに解けり。甚誤れり。老子の意は。天下を治むるにあり。もし唯一の小國を右の如く治めたりとも。隣國より來り侵すことあらば。何を以てか無事なることを得んや。故に前に釋せし如く。國を小にし民を寡くするの義に見るべきなり。古の制に。大國は百里に過ぎずと定められたれども。其實は晋楚齊秦などは。初より數百里の地なり。是小國を並吞する故にして。争奪の基なり。且又民も封境の内は。自由に往來する者なれば。百萬石の國なれば。民も百萬石の中を往來して。其中にあることを残らず見聞するなり。一萬石なれば。一萬石の間の事に限るなり。故に國を小にする程。民の外出すること遠からず。其見聞する所狭くして。世上繁華の風俗に遷ることなきなり。老子の心は。我もし天下の宰たらば。今の諸侯の數。千あらば是を五千にも。一萬にも分ちて。百里の國をば。五十里か三十里にすべし。此の如くすれば。天下は治まり易しとなり。

信言不美章

信言不美 美言不信

此章は。八十一章の終りにて。老子自ら著書の大意を残らず掲げたるなり。先づ第一に人の言に信言

あり。美言あり。信言は。何事も實情を言ひたる故。聞て格別味のあるといふことはなきなり。美言は旨き言なり。美は旨しと云ふ心なり。是は如何にも味ある様に覺ゆれども。元來虚を飾りたる言にて。誠の用に立ちがたし。

善言不辯 辯言不善

又言に善言とて人の爲めになる言あり。是は辯舌に任せて。すらすらと言ひたる言には非ず。夫故聞者耳に通徹して感心する様にはなきなり。辯言とは。自由自在に辯を馳せて。面白き様にあれど。人の爲めにはならぬなり。

知者不博 博者不知

又人の言に知者の言あり。是は信實の道理を見たる者にて。博學多聞に亘ることなし。博者とは。種々の道具を澤山に並べ立つる。白人だましの學問にて。親切の言には非ず。

以上の三説。大抵一意なり。老子は。平生信言を言ひて。美言を言はず。善言を言ひて。辯言を言はず。學問の流義も。簡要的實なる道理を言ひて。道具を澤山にすることなし。故に世俗に合はず。五千言皆其通りなり。聞人篤と信美善辯知不知の差別を知りて。而してのち五千言始めて用に立つなり。是迄を此章の上節とす。

聖人不積 既以爲人己愈有 既以與人己愈多

扱右の言に品あることを知りて。而してのち五千言始めて用に立つなり。夫に付て。第一簡要の心得は。老子の道は。無欲を貴ぶ。常人は金銀財寶よりして。一切のもの。皆己に積み蓄ふるを貴ぶ。老子は少しも己に蓄ふると云ふことなく。之を散じて人と共にするなり。是世人の第一に難ずる處にて。とても行ひ難しと思へり。其實は人の爲めにすれば。己が物は愈々有り。愈々多くなる者なり。其證據は。范蠡再び千金を散じたれども。其身は愈々富有にして。陶朱公と云ふ天下第一の福人になれり。漢の文帝は。屢租税を免されたれども。府庫倉廩は。益々富みて。太倉の粟。陳々相因ると云ふ様になれり。是を以て。積まざるの利益を知る可し。此道理を篤と腹に入るべし。是老子の道を行ふに付て。第一の心得なり。是迄を中節とす。

天之道<sup>ハ</sup>。利<sup>アリテ</sup>。而不<sup>レ</sup>害<sup>アラ</sup>。聖人之道<sup>ハ</sup>。爲<sup>シテ</sup>。而不<sup>レ</sup>争<sup>ハ</sup>。

猶又第一の極秘の傳あり。凡そ天地間の道理。前に一利あれば。後に一害あり。是は第二章に委しく述べたるが如し。物の數にて。知者も如何ともすること能はざる所なり。唯聖人其秘訣を得給ふ故に。上善をなして。天道に則り給へり。老子の道は。無爲を貴ぶ。然れども爲して争はざれば。如何程なしても害なし。無爲の無爲たる。無爲にあらずして。争はざるにあり。此譯を得れば。終日なして。未嘗てなさすと云ふ主意に當るなり。全篇一利一害相並ぶことを論じ。卷末に至りて。利あつて害あらずと云ひ。一部無爲を主として。卷末に至りて爲而不争と云ふ。是老子第一の秘訣なり。是を下節とす。

大略右の通りにて。先づ最初に。立言の體を合點し。而してのち此書讀むべし。其次は。無欲は身の利益たることを篤と知りて。老子の言に安んず可し。猶其上の極意は。無爲の中に爲あり。一切手を出さぬこと、心得るは。大なる間違ひなり。其所を篤と合點すれば。五千言始めて世の用に立つなり。是は一部の終りなり。故に丁寧反覆して極意を明す者なり。

老子摘解卷下

嘉永二年己酉六月

豊後 廣瀬 求馬 著

大坂心齋橋通博勞町

發兌書肆

河内屋 茂兵衛

江戸日本橋通一丁目

須原屋 茂兵衛

# 老子辨

齋藤拙堂

其一

余初め史記を讀んで、孔子禮を老子に問ふに至り、竊に好事の假託なるを疑ひしが、今果して其の妄なるを知る。夫子夙に禮を知ると稱し、且つ韓宣子云ふ、周禮盡く魯に在りと、夫子亦謂ふ、魯に君子多しと。今且つ足らずと爲し、而して之を周に求めば、宜しく通明博達の士に従ふべし、何爲れぞ僕々爾として一毫叟に従つて之を問ひ、俄に繼ぐに猶龍の如きの歎を以てせる。何の見る所にして尊崇する此の如く、何の聞く所にして稱賛する此の如き。殆んど無知の婦女子、老愚の比丘に遇つて隨喜渴仰し、自ら其の然る所以を解せざるが如し。且つ夫子の問はんと欲する所の者は何事ぞや。彼れが人世を詭視し、禮法を蔑視せること日久し。淺丈夫と雖も、亦必ず問ふに事を以てすべからざるを知る。夫子獨り知ること能はず、果して不遜の對へに遇ふとは、惡んぞ其の聖たるに在らん。夫子固に下問を恥ぢず、然れども必ず此の無益の事を爲さじ。夫子古今を尙論し、其の稱道する所、上は二帝三王より、下は夷惠管晏子産の徒に及び、汲々として及ばざるが如し。矧んや其の親炙する所は、宜しく稱揚して口に容れざるべし。而るに一言の老子に及ぶ者なし。孟子は孔子を學ぶ者也。聖道を輔翼し。邪説を摺撃して、

一も含糊する所なし。老子を以て賢と爲さば、必ず夷惠を稱する者を以て之を稱せん。若し以て邪と爲さば、必ず楊墨を距ぐ者を以て之を距がん。今又一言の老子に及ぶ者なし。道を論ずるは語孟より大なるは莫く、事を紀するは左氏より治きは莫きに、皆少しも概見せずして、獨り史遷の書に見ゆ。是に知る老子は春秋以前の人にあらず、必ず孟子より先きならず、況んや孔子に於てをや。蓋し此の事本と莊周に出づ。周の學たる、老を尊び孔を抑へ、此の誕妄を爲し、孔子は吾師の弟子と謂ふに過ぎず。猶佛家の夫子を謂つて儒童菩薩と爲すが如く、本と相校するに足らず。遷は獨り儒にあらずや。何を苦んで其の餘唾を拾ひ、厚く聖人を誣ひ、以て異端の氣を張れる。周の虚説、是に至つて實と爲る。周の説荒唐放恣、一語の信すべきなし。許由の堯に於ける、伯成子高の禹に於ける、卞隨務光の湯に於ける、皆憑虚無根にして、人信ぜず。獨り夫子の老子を師とするに至つては、曾て疑を致す者なきは、是れ誰が罪ぞや。遷、周を傳して云はく、寓言空語、事實なしと。既に其の誕を知りて、棄去する能はず、何を僞契を執つて以て證と爲すに異ならん。吾れ敢て信せざるなり。

## 其二

孔子世家に、其の老子を見るを以て、三十以前の事と爲す。按ずるに、夫子は周の靈王の二十一年に生る。其の三十歳は、則ち景王の二十三年に當る。老子の年齢は、知るべからずと雖も、既に齒徳を以て夫子の貴ぶ所たらば、當に是れ蓋老の人なるべく、兒子あらば、則ち必ず長大ならん。今其の傳に云はく、老子の子名は宗、魏の將となり、段干に封ぜらる。夫れ魏國の建ちしは、威烈王の二十三年に在

りて、夫子の三十以前を距ること、殆んど百三十年なり。而して宗其の將たるは、更に此の後に在り。父子の年代、何を以て懸絶する此に至れる。疑ふべきの一也。又云はく、宗の子は注、注の子は宮、宮の玄孫は假。假は漢の孝文帝に仕へ、而して假の子解、膠西王卬の太傅たりと。卬は景帝の時に當る。景帝の元年は、夫子の未だ三十ならざる時を距ること、殆んど三百七十年。而して李氏の子孫、世を傳ふるに僅に八。夫子の晩歳より、史遷絶筆の年に至るまで、三百六十年なる能はず。而して孔氏既に十三世を歴たり。何ぞ李氏の子孫、皆能く壽多く。而して孔氏の子孫、獨り皆然る能はざる。疑ふべきの二也。傳の首に言はく、老子は楚の苦縣の人と。索隱に曰はく、苦縣は本と陳に屬す、春秋の時、楚陳を滅し、而して苦又楚に屬すと。按ずるに、楚の陳を滅せるは、則ち孔子の卒せる年なり。老子孔子に先だ、ば、當に陳の苦縣の人と言ふべし。而るに苦を陳に係けずして楚に係く。疑ふべきの三也。此の三者は、亦以て老子の戰國の人たるを知るに足る。今按ずるに、魏の世家に、安釐王の三年に、段干子といふ者あり。戰國策を閲するに、乃ち其の名は崇なるを知る。路史に云はく、段干は李姓の邑なりと。遷の記する所の、宗魏將と爲りて段干に封せられし者と合す。是れ必ず老子の子なるべし。宗崇古へ相通す。其の李と稱せずして段干と稱する者は、猶柳下惠東里子産の類の如く、段干崇の李宗たる必せり。崇將と爲り功を累ね封邑を獲、因つて以て氏と爲す。其の間必ず三十四十年を歴たるべく、是に至つて當に是れ六七十歳なるべし。而して其の少壯は襄哀の間に在り、漢景の初に至るまで百七八十年、乃ち七八世の數なり。因つて以て之を推せば、老子は則ち周の顯王以後の人にして、少しく孟子より後

れ、其の書を著すこと又最も晩し。故に孟子之を見るを得ざりしのみ。

## 其三

傳中に云へるあり、老萊子は亦楚の人なり、孔子と時を同じうすと。又云はく、「孔子の死後百二十九年にして、史記に周の大史儋秦の獻公に見ゆといへり。或人曰はく、儋は即ち老子なりと。或人曰はく、非なりと」、蓋し老子は隱君子にして、本末詳かならず。故に遷雜説を獵取して、以て此の傳を綴る。竟に亦的かに何れの時の人たるを知らざるなり。遷又其の年代の孔子の時に及ばざるを苦み、遂に其の壽なりしを稱し、或は百六十歳と爲し、或は二百歳と爲し、遷就附會す。益々其の疑ふべきを見るなり。今若し儋を以て老子と爲さば、孔子の壽七十三に、没後の百二十九年を以て之に加ふれば、二百二年を得。老子果して二百歳ならば、則ち夫子に後ること三年にして生れたるなり。果して百六十歳ならば、則ち其の生夫子に後ること四十餘年にして、夫子の三十以前には謂はゆる老子といふ者なきなり。傳に又言はく、老子周に居ること久しうして去り、去つて後關尹の爲に五千文を著すと。其の獻公に見えたる後尙恙なかりしこと知るべし。果して然らば、則ち二百歳と雖も。夫子の壯歳に及ばざるなり。是れ亦傳中の一破綻なり。

## 其四

戴記に、夫子禮を説き、屢々諸を老聃に聞くと稱せり。是れ誣罔の由つて起る所なり。今老子に云ふ、禮は忠信の薄にして、亂の首なりと。豈肯て人の爲に喪葬の苛禮を記さんや。又列傳に據るに、孔子將

に禮を老子に問はんとす、老子唯禮を譏るの言あるのみ、未だ肯て其の他を言はず、夫子復問ふことを得ずして去るといへり。安んぞ他日諸を老聃に聞くと謂ふを得んや。蓋し莊列の徒、當時老聃の事あるを以て、此の語を捏造して、老子に附會す、其の齟齬する此の如きを知らざるなり。又王弼論語を注して、老彭を以て老子彭祖と爲す。今老子の言先王に本づかずして、別に一家を創む。烏んぞ述べて作らず、信じて古へを好むと爲すを得んや。其の老彭に非ること亦明かなり。且つ老子は姓は李、名は耳、字は伯陽、其の書を稱して老子と曰ふ。老聃老彭の如きは、自ら是れ一人の姓名なり、混じて一と爲すを得ず。遷又聃を以て老子の諡となす。然れども未だ諡法に聃の字あるを聞かざるなり。戴記に載する所の老聃は、博く典禮を識り、夫子の問に應ず。是れ誠に述べて作らずと爲す。誠に信じて古へを好むと爲す。蓋し聃は其の名、彭は其の字にして、恐らくは論語に稱する所と一人ならん。

## 其五

老子中の言語文字、秦漢に近似する者あり。亦其の孟子以前の人に非るを知るに足る。蓋し論語に仁を言ふ數十條、一も仁義を對言する者なし。獨り易傳に曰はく、人の道を立つ。曰はく仁と義となりと。此を除いて外、六經の無き所なり。孟子に至つて始めて口を開けば仁義と説く。是の兩字孟子を以て鼻祖と爲して可なり。而るに老子曰はく、大道廢れて仁義ありと。曰はく仁を絶ち義を棄て、民孝慈に復すと。曰はく、徳を失つて後に仁、仁を失つて後に義と。寥寥たる短篇、仁義を刺譏すること一ならず。蓋し其の生孟子に後れ、七篇の餘論を聞くを得たり。故に務めて其の説に反するのみ。曰はく希言

は自然なりと。曰はく、知る者は言はず、言ふ者は知らずと。此れ堅白同異の辨を斥くるに似たり。曰はく、法令滋々、彰はれて、盜賊多く有りと。曰はく、其の政察々たれば、其の民缺々たりと。此れ刑名苛察の害を言ふに似たり。曰はく、將に天下を取らんとして之を爲す者、吾れ其の得ざるを見るのみと。曰はく、天下を取る者は、常に無事を以てす、其の事有るに及んでは、以て天下を取るに足らずと。此れ七雄の争を言ふに似たり。晉楚の事の如きは、則ち區々として主盟を争ふに過ぎず、未だ天下を争奪するに至らず。曰はく、師の處る所は、荆棘生じ。大軍の後は、必ず凶年ありと。此れ六國の兵を言ふに似たり。春秋の戰の如きは、則ち大敗して尸を輿するも、數百千人に過ぎず、未だ此の如きの甚しきには至らず。曰はく、侯王自ら孤寡不穀と稱すと。曰はく人の惡む所は、唯孤寡不穀、而して王公以て稱と爲すと。按ずるに、禮に孤は小侯の自稱、寡人は諸侯の自稱、不穀は夷狄蠻君の自稱と。皆天王の稱にあらず。戰國に至つて、諸侯王を僭し、而も稱謂猶舊に依る。謂はゆる侯王とは、戰國の諸侯を指すのみ。曰はく、君子居れば則ち左を貴び、兵を用ふれば則ち右を貴ぶと。曰はく、上將軍は右に處り、偏將軍は左に處ると。按ずるに、甘誓に、左は左を攻めざることを、右は右を攻めざるの先に在り。左傳に趙夙の戒に御たる、畢萬右たるの先に在り。韓厥中に御となりて齊侯に従ふと。杜預曰はく、元帥に非るよりは、御者は皆中に在り將は左に在り、子重令尹を以て左に將たり、子辛右尹を以て右に將たりと。乃ち知る兵車軍行、皆左を尙んで右を賤むを。故に禮の少儀に兵車に乗ずるを論じて云はく、軍には左を尙ぶと。春秋以前は、未だ軍に右を尙ぶ者あらず。蓋し戰國に至つて、兵を謂つて凶器と爲

し、凶軍の禮、遂に混じて一となる。是れ當時の俗にして、古禮然るに非るなり。吾れ是を以て老子の戰國の季に生れしを知るなり。(拙堂文集卷四)

老子辯

明宋景濂

老子二卷、道經德經各々一、凡て八十一章、五千七百四十八言あり。周の柱下の史李耳撰す。耳字は伯陽、一の字は聃。聃とは、耳漫くして輪なき也。或は稱す、周の平王の四十二年、其の書を以て關の尹喜に授くと。今按するに、平王の四十九年は春秋に入り、實に魯の隱公の元年也。孔子は則ち襄公の二十二年に生れしを以て、春秋に入りてより下、孔子の生を距ること、已に一百七十二年也。老聃は孔子の嘗て禮を問ひし所の者、何ぞ其れ壽なるや。豈史記に言ふ所の老子百有六十餘歲、及び或は二百餘歲と言ふ者は、果して信すべきか。聃が書に言ふ所は、大抵歛守退藏して、物の先と爲らず、而して壹に自然に返す。其の該ぬる所の者甚だ廣きに由つて、故に後世多く之を尊び之を行ふ。之を視れども見えず、名づけて夷と曰ふ、之を聽けども聞えず、名づけて希と曰ふ、之を搏ふれども得ず、名づけて微と曰ふと。道家之を祖とす。谷神死せず、是を玄牝と謂ふ、玄牝の門、是を天地の根と謂ふと。神仙家之を祖とす。吾れ敢て主と爲らずして客と爲り、敢て寸を進めずして尺を退く、是を行くことなきに行き、臂なきに攘げ、敵なきに仍き、兵なきに執ると謂ふ。禍は敵を輕んするより大なるは莫く、敵を輕んすれば幾んど吾が寶を喪ふ、故に兵を抗げて相加ふるときは、哀む者は勝つと。兵家之を祖とす。道は



冲しけれども、之を用ひて或は盈たず、淵乎として萬物の宗に似たり。其の鋭を挫き、其の紛を解き、其の光を和げて其の塵に同ず、湛として存するが若きに似たり。吾れ誰れの子なるを知らず、帝の先に象れりと。莊列之を祖とす。將に之を翁めんと欲すれば、必ず固く之を張り、將に之を弱めんと欲すれば、必ず固く之を強め、將に之を廢せんと欲すれば、必ず固く之を興し、將に之を奪はんと欲すれば、必ず固く之を與ふと。申韓之を祖とす。正を以て國を治め、奇を以て兵を用ひ、事なきを以て天下を取ると。張良之を祖とす。我れ爲すことなくして民自ら化し、我れ靜を好んで民自ら正しく、我れ事なくして民自ら富み、我れ欲なくして民自ら朴なりと。曹參之を祖とす。聃も亦豪傑の士なるかな。傷むらくは其の本未だ正しからずして、末流の弊、士君子に貽るに至つては、虛玄長じて晉室亂るの言あり。聃が立言の時と雖も、亦自ら其の禍斯くの若く慘たるを知らざりし也。嗚呼此は姑く之を置く。道家は黃老を宗とせるに、黃帝の書已に傳はらず、而して老聃も亦僅に此の五千言あるのみ。其の徒たる者、乃ち棄てゝ習はず、反つて釋氏の經教に依倣して以て書を成す。開元の列する所の三洞瓊綱、固より多く亡缺す。而して祥符寶文統傳に記す所、若くは大洞真、若くは靈寶洞元、若くは太上洞神、若くは太真、若くは太平、若くは太清、若くは正一の諸部、總て四千三百五十九卷。又多く雜ふるに符咒、法籙、丹藥、方技の屬を以てす。皆老氏の道はざる所。米巫祭酒の流、猶自ら諸を人に號して曰はく、吾れは蓋し道家也、吾れは蓋し道家也と云ふ。(宋學士全集卷二十七)

老子 攷 異

清 汪 中

史記孔子世家に云はく、南宮敬叔孔子と俱に周に適き禮を問ふ、蓋し老子を見ると云ふと。老莊申韓列傳に云はく、孔子周に適き、將に禮を老子に問はんとすと。按ずるに、老子の言行は、今曾子問に見ゆる者凡そ四。是れ孔子の從學する所の者、信すべきなり。夫れ葬を助けて日食に遇ひ、然も且つ星を見るを以て嫌と爲し、柩を止めて以て變を聽く、其の禮に謹むや是の如し。其の書に至つては則ち曰はく、禮は忠信の薄にして亂の首なりと。下殤の葬に、周召史佚を稱引す、其の前哲を尊信するや是の如し。而るに其の書には則ち曰はく、聖人死せざれば大盜止まずと。彼此乖違すること甚し。故に鄭注に、古への壽考者の稱なりと謂ひ、黃東發の日鈔にも亦之を疑ひ、而して皆以て其の説を輔くること無し。其の疑一なり。本傳に云はく、老子は楚の苦縣の厲郷曲仁里の人なりと。又云はく、周の守藏室の史なりと。按ずるに、周室既に東し、辛有晉に入り、左傳昭二十年司馬秦に適き、大史公自序史角魯に在り、呂氏春秋當樂篇 王官の族、或は四方に流播し、列國の産、惟晉悼嘗て周に仕へしのみ、其の他固に聞ゆること無し。況んや楚の周に於ける、聲教中ごろ阻し、又魯鄭の比にあらざるをや。且つ古の典籍舊聞、惟晉史に在るのみ、其の人並に世官宿業にして、羈旅に其の身を置く所なし。其の疑二也。本傳に又云はく、老

子は隱君子なりと。身王官たれば、隱と謂ふべからず。其の疑三也。今按ずるに、列子の黄帝說符の二篇に、凡そ三たび列子と關尹子との答問の語を載す。莊子達生篇と、列子黃帝篇と文同じ、呂氏春秋審己篇と、列子說符篇と文同じ、而して列子の鄭の子陽と同時なりしこと、本書に見ゆ。六國表に、鄭の其の相駟子陽を殺し、を韓の列侯の二年に在りとし、上孔子の没を距ること、凡そ八十二年なり。關尹子の年世、既に考へて知るべく、則ち關尹の爲に書を著せる老子は、其の年世亦從つて知るべし。文子精誠篇に老子を引いて曰はく、秦楚燕魏の歌、傳を異にして皆樂むと。按ずるに燕は春秋の世を終ふるまで、盟會を通ぜず。精誠篇に稱す、燕は文侯より後、始めて冠帶の國に與かると。燕の世家に、兩文公あり。武公の子の文公は、素隱に世本を引いて閔公に作る。其の事蹟左氏春秋に見えず。始めて冠帶の國に與かると謂ふを得ず。桓公の子も亦文公と稱す。司馬遷、其の車馬金帛を予へて、以て趙に至り、六國を約して從を爲さしめたるを稱す。文子の稱する所と、時勢正に合す。【編者云ふ、燕は文侯より後云々、文子に見えず、考ふべし、】文公の元年は、上孔子の没を距ること、凡そ百二十六年なり。老子は燕と秦楚魏とを並稱せるを以て、則ち老子は已に文公の始めて強なるを見るに及べるなり。又魏の建國は、上孔子の没を距ること、凡そ七十五年なり。而して老子は之を以て三國と齒せしめられたれば、則ち老子は已に其の侯たるを見るに及べるなり。列子黃帝篇に、老子の楊朱に教へし事を載す。莊子寓言篇、文同じ。惟、朱を以て子居に作る。今江東、朱を讀むこと居の如し。張湛列子に注して云ふ、朱字は子居と、非なり。楊朱篇に、禽子曰はく、子の言を以て老聃關尹に問はく、則ち子の言當らん。吾が言を以て大禹墨翟に問はく、則ち吾が言當らんと。然れば則ち朱は固に老子の弟子なり。又云はく、端木叔は、子貢の世なりと。又云はく、其の死

するや瘞埋の資なしと。又云はく、禽滑釐曰はく、端木叔は狂人なり、其の祖を辱むと。段干生曰はく、端木叔は達人なり、徳其の祖に過ぎたりと。朱は老子の弟子たり、而して子貢の孫の死を見るに及びたれば、則ち朱の師とせる所の老子は、孔子と時を同じうするを得ざるなり。說苑政理篇に、楊朱梁王に見えて言ふ、天下を治むること、諸を掌に運らすが如しと。梁の王と稱せるは、惠王より始まり、惠王の元年は、上孔子の没を距ること、凡そ百十八年なり。楊朱已に其の王たるを見るに及びたれば、則ち朱の師事する所の老子も、其の年世知るべし。本傳に云はく、周の衰ふるを見て、乃ち遂に去つて關に至ると。抱朴子に以て散關と爲し、又以て函谷關と爲す。按ずるに、散關は遠く岐州に在り。秦の函谷關は靈寶縣に在りて、正に周より秦に適くの道に當れり。關尹又鄭の列子と相接すれば、則ち函谷とするを是と爲す。函谷の置は、書に明文なし。孔子の世に當つて、二嶠猶晉の地たり、桃林の塞、詹瑕實に之を守れり。惟、賈誼の新書過秦論に云はく、秦の孝公崤函の固に據ると。則ち是れ舊其の地ありしなり。秦は躁懷より以後、數世中ごろ衰へ、獻公に至つて始めて大なり。故に本紀に、獻公の二十一年、晉と石門に戦ひ、首を斬る六萬。二十三年、魏晉と少梁に戦ひ、其の將公孫雍を虜にすと。然れば則ち是の關の置は、實に獻公の世に在り。是に由つて之を言へば、孔子の禮を問ふ所の者は聃なり。其の人は周の守藏の史たり。言と行とは、則ち曾子間に載する所の者は是れ也。周の太史儋の秦の獻公に見えしは、本紀に獻公の十一年に在りて、魏の文侯の没を去る十三年なり。而して趙子の子宗、魏の將となりて、段干に封せらるれば、魏の世家に、安釐王の四年、魏將段干子秦に南陽を予へて以て和せんと請ふと。國策に、華軍の戦に、魏秦に

勝たず、明年將に段干崇をして地を割いて讓ぜしめんとすと。六國表に、秦の昭王の三十四年、白起魏の華陽の軍を撃つと。按ずるに是の時、上孔子の卒を距ること、凡そ二百一十年なり。則ち儻の子たること疑なし。而して道德の意五千餘言を言ふ者は儻なり。其の秦に入りて獻公に見えしは、即ち周を去つて關に至りし事なり。本傳に云はく、或人曰はく、儻は即ち老子なりと。其の言蹇なり。孔子の老萊子を稱するに至つては、今太傅禮の衛將軍文子篇に見え、史記の仲尼弟子列傳に、亦其の説を載す。而して云ふ所の貧にして樂むとは、隱君子の文と正に合す。老萊子の楚人たるは、又漢書藝文志に見ゆ。蓋し即ち苦縣の厲郷曲仁里なり。而して老聃を楚人とするは、則ち又老萊子に因つて誤れるなり。故に本傳に、老子孔子に語つて、子の驕色と多欲と、態心と淫志とを去れといへりと。而して莊子外物篇には則ち曰はく、老萊子孔子に謂ふ、汝が躬の矜と汝が容の知とを去れと。國策に老萊子の孔子に教へし語を載す。孔叢子抗志篇には。以て老萊子子思に語ると爲し、而して說苑敬慎篇には、則ち以て常縱老子に教ふと爲す。呂氏春秋慎大篇に、商容の圖を表すと。高誘の注に、商容は殷の賢人にして、老子の師なりと。商容常縱者近くして誤れるなり。淮南主術訓に、商容の圖を表すと。注同じ。釋稱訓に、老子商容に學び、舌を見て柔を守るを知ると。呂氏春秋離謂篇に、箕子商容此を以て窮すと。注に商容は紂の時の賢人にして、老子の從學する所なりと。然れば則ち老萊子の老子と稱せるや舊し。實は則ち三人相蒙らざるなり。莊子に老聃の言を載せたるが若きは、率ね道德の意に原く。而して天道篇に。孔子の西の方書を周室に藏めんとせるを載せたるは、尤も後人を誤らしむ。寓言は十が九と、固に已に自ら之を掲げたり。(述學補遺)

(因に云ふ、汪中の老子攷異に對しては、島田鈞一氏の老子考に駁論あり、經史說林第一集に收む)。

# 非老

清吳

鼎

孔子は剛を喜び、老子は柔を喜ぶ。孔老の尙ふ所同じからず。孔門は是非を以て一定と爲し、老子は以て定まりなしと爲す。而して是非を言ふを畏る。孔門の教は、善を好し惡を惡む。老子の教は、善惡平等なり。老子は是非を以て善惡と爲さず、而して好惡を以て善惡と爲す。是非に兩途なく、好惡に萬端あり。老子の善を言ふは、猶佛氏の善哉善哉と云ふの善の如し。善く道を爲す者、善く士たる者、善く戰ふ者、善く敵に勝つ者、善く人を用ふる者と云ふが如き、又善行、善言、善計、善閉、善結、善救、善利、善地、善淵、善仁、善信、善治、善能、善時、善下の類の如き、皆是れ也。惟れ物の本善を以て善と爲さず、而して吾が心に之を善しとするを以て善と爲す。故に其の言に曰はく、善復た妖と爲ると。又曰はく、善の惡と相去ること何若んと。又曰はく、天下皆善の善たるを知る、斯れ不善なりと、又曰はく善者は之を善とし、不善者をも亦之を善として善を得しむと。又曰はく、善者は辯ならず、辯者は善ならずと。凡そ言ふ所の善とは、俱に是非得失の外に在り。孔子の至善に止まり、孟子の性善を道ふの善と同じからず。

麋鹿は薦を食ひ、薦を以て善しと爲す。螂蛆は帶を甘んじ、帶を以て善しと爲す。鴟鴞は鼠を嗜み、鼠を以て善しと爲す。老氏の善と言ふは、自ら是れ此の意なり。故に善を惡に齊しうす。毛嬙麗姬は、人の美とする所なり。魚之を見れば深く入り、鳥之を見れば高く飛び、麋鹿は之を見て決驟す。人の美とする所は、物の惡む所なり。老子の惡と言ふは、自ら是れ此の意なり。故に惡を善に齊しうす。

善を惡に齊しうし、惡を善に齊しうするは、是れ謂はゆる善なく惡なきなり。而も卒に善に津々たる者、是れ謂はゆる無善無惡を之れ至善と謂ふなり。

老子は性を言はず。若し性を言はば、我れ其の必ず無善無惡と曰はんことを知るなり。何に於て之を知る。大道は汎として、其れ左右すべしといふを以て、之を知る。善の惡と相去ることいかんといふを以て、之を知る。

無善無惡、之を至善と謂ふは、以て老を釋すべく、以て孔を釋すべからず。

善惡を齊しうする者、終に善惡なきこと能はず。老子曰はく、善者は吾れ之を善とす、不善者も吾れ亦之を善として善を得しむと。此れ善惡を無に渾するにあらず、乃ち善惡を善に并するなり。但其の謂はゆる之を善とし、謂はゆる善を得とは、此れ吾が心之を善しとするの善なり。其の謂はゆる善者不善者とは、此れ則ち物に在る本來の善本來の不善なり。夫れ物に在る本來の善本來の不善は、老子も亦明々自ら之を言ふ。此れ亦是非の心の味ますべからざる者なり。願つて乃ち善者は之を善とし、不善者も亦

之を善とすと曰ふは、之を一にして先づ分つを見、之を同じくして適々異にするを見る。故に曰はく、善惡を齊しうする者、終に善惡なきこと能はずと。

善者は吾れ之を善とし、不善者も吾れ亦之を善とすと。是れ善は固より善にして、惡も亦善なるなり。善惡は既に齊同なり。然らば則ち老子の言ふ所の惡とは、固より惡にして、言ふ所の善も亦惡なるなり。善者不善者とは、此れ物に在るの理なり。善者は之を善とし、不善者は之を不善とするは、此れ物に處するの義なり。老子は然らず。故に義を棄つるなり。

善惡あれば、則ち是非あり。是非の心は、智の端なり。是非あれば、則ち老氏の善とする所に害あり。故に智を棄つるなり。

聖は通明なり。善惡ただ明かなるは、老氏の意にあらず。故に聖を絶つなり。

仁は、私心なくして天理に合するの謂なり。仁とは心本善なり。故に善を見ては、即ち之を善とす。心本不善なし。故に不善を見ては、即ち之を不善とす。此れ謂はゆる私心なきなり。天理は本善なり。天理に循ふ者を、即ち之を善とす。天理は本不善なし。天理に拂る者を、即ち之を不善とす。此れ謂はゆる天理に合するなり。老子は然らず。故に仁を絶つ。仁を絶つに至つて、刑名法術其の毒を肆はしにす。

孔門の學を言ふや、視ることは明かならんことを思ひ、聽くことは聰からんことを思ふと云ふが如く、學は乃ち其の本然に復還するなり。老子は則ち曰はく、汝の耳は自ら聰く、目は自ら明かなり。學べば則ち其の本然を増多すと。故に曰はく、學を絶つと。又曰はく、學を爲せば日に益し、道を爲せば日に

損すと。學を爲せば日に益すとは、益は、猶謔に許多の骨董を増すと云ふが如し。學とは、其の學ばざる所の者を學ぶなり。故に曰はく、學ばざるを學ぶと。夫れ其の當に學ぶべき所を學ぶ能はずして、但其の學ばざる所を學ぶと云ふ。則ち以て至善の域に入ること無し。聖にして、自ら以て聖と爲さず。故に聖を絶つ。智にして、自ら以て智と爲さず。故に智を棄つ。仁にして、自ら以て仁と爲さず。故に仁を絶つ。義にして、自ら以て義と爲さず。故に義を棄つ。學んで、自ら以て學ぶと爲さず。故に學を絶つ。其の意本天下に惡しきことなし。而も立言高きに過ぎ、弊乃ち百出す。

或人問ふ、莊生言はく、聖人生れて大盜起る。聖人死せざれば、大盜止まず、故に聖を絶ち智を棄て、大盜乃ち止むと。其の老子の絶聖の説を發明する所以の者、深切著明なりと謂ふべし。今予乃ち謂ふ、聖にして、自ら以て聖と爲さず、故に聖を絶つと。亦莊子の云ふ所に異なりと。曰はく、老子の一書、上篇に聖人を言ふ者六、下篇に聖人を言ふ者十有六。蓋し亦聖人の道、聖人の治に津々たるなり。莊生が聖人の罪、聖人の過を詛言し、聖人死して天下治まるを必とするが若きにあらざるなり。夫れ既に聖人の道、聖人の治に津々として、而も乃ち絶聖棄智と曰ふ。是を以て其の聖にして、自ら以て聖と爲さざるを、聖を絶つと爲し、智にして、自ら以て智と爲さざるを、智を棄つと爲すなるを知るなり。然と雖も、其の父人を殺して讐を報ゆれば、其子必ず且に劫を行はんとす。老子は讐を報ゆる者なり。莊子

は劫を行ふ者なり。老子の説を充たさば、必ず莊子の如きに至つて後に已まん。

老子の道德を言ふ、其の意専ら重きこと道に在り。故に域中に四大あり、而して道一に處ると。徳は則ち上徳下徳の分あり、而して下徳は徳を以て之を許さず。故に云はく、下徳は徳を失はず、是を以て徳なしと。其の謂はゆる道を失つて後に徳ありとは、蓋し云ふ、渾淪の道は、天地人物に充足する者。而して我れ之に據りて以て徳を爲す。徳成れば、則ち道分れ、道分るれば、則ち道失ふなりと。其の謂はゆる徳を失つて後に仁ありとは、蓋し言ふ、徳は猶吾が心に渾全たり。而るに我れ之を分つて仁と爲し義と爲し禮と爲し、名目愈々分れて、渾全なる者愈々失ふ。故に徳を失つて後に仁ありと。仁は愛を主とし、而して義は斷を主とす。斷は愛を割く者なり。故に曰はく、仁を失つて後に義ありと。不義の人に向つて、之を拜し之に跪き、之に臣となり之に僕となるは、禮は則ち得たれども、義は則ち失せり。故に曰はく、義を失つて後に禮ありと。田成子其の君を殺して、其の國を盜めり。而るに向の齊の臣たる者、仍嚴肅にして君臣の禮を行へり。故に曰はく、禮は忠信の薄きものにして亂の首めなりと。老子の意は、蓋し道德仁義禮を分つて五物と爲すなり。又老子云はく、智を以て國を治むるは、國の賊なりと。又云はく、信なる者は吾れ之を信とし、不信なる者も吾れ亦之を信として信を得しむと。則ち是れ智信を連ねて七物と爲すなり。夫れ既に道德仁義禮智信を以て七物と爲す、何そ其の言の紛糾舛錯せるを怪まんや。善いかな韓子の言や、其の原性に曰はく、性は生と俱に生ずるなり。其の性たる所以の者五、曰はく仁、曰はく禮、曰はく信、曰はく義、曰はく智と。其の原道に曰はく、博く愛する、之を仁

と謂ひ、行うて之を宜しうする、之を義と謂ひ、是に由つて之く、之を道と謂ひ、己れに足りて外に待つことなき、之を徳と謂ふと。又曰はく、老子の、仁義を小として、之を非毀するは、其の見る者小なればなり。彼れは煦々を以て仁と爲し、子々を義と爲す。其の之を小とするや則ち宜なり。其の謂はゆる道とは、其の道とする所を道とせる者にして、吾が謂はゆる道には非るなり。其の謂はゆる徳とは、其の徳とする所を徳とせる者にして、吾が謂はゆる徳には非るなりと。又曰はく凡そ吾が謂はゆる道徳と云ふ者は、仁と義とを合して之を言ふなり。天下の公言なり。老子の謂はゆる道徳と云ふ者は、仁と義とを去て、之を言ふなり。一人の私言なりと。聖人復た起るとも、斯の言を易へじ。(昭代叢書癸集第四十二)

(以上の論説の外に、老子是正の伊藤長堅の序。董思靖の老子序説老子集解。姚鼐の老子章義自序。潘德輿の老彭辨義一齋集。紀慎齋の老子約説。魏源の老子論老子本義。江璩の讀子卮言の、論道家爲百家所從出。論黃老老莊申韓之遞變。論老子之姓氏名字。の諸章。胡適の中國哲學史大綱上卷の老子章等あり。参考すべし)

索引 (頁數)

第一章	一—三	五—一五	一—三
第二章	三—六	一六—二四	三—七
第三章	六—九	二五—三〇	
第四章	九—一一	三〇—三八	
第五章	一一—一四	三九—四三	
第六章	一四—一六	四三—四六	
第七章	一六—一七	四六—四八	
第八章	一七—一八	四八—五二	一三—一五
第九章	一八—一九	五二—五五	
第十章	一九—二一	五六—六一	
第十一章	二一—二三	六一—六三	七—一〇
第十二章	二三—二四	六三—六六	
第十三章	二四—二五	六六—六九	

索引

第十四章	二六——二八	六九——七四	
第十五章	二八——三二	七五——八一	一〇——一三
第十六章	三二——三五	八二——八七	一六——一九
第十七章	三五——三六	八七——九〇	
第十八章	三六——三七	九〇——九二	
第十九章	三七——三八	九二——九四	
第二十章	三九——四二	九四——一〇〇	
第二十一章	四二——四四	一〇〇——一〇三	
第二十二章	四四——四五	一〇三——一〇七	
第二十三章	四六——四八	一〇七——一一〇	一九——二二
第二十四章	四八——四九	一一〇——一一一	
第二十五章	四九——五一	一一一——一一八	
第二十六章	五一——五三	一一八——一二一	
第二十七章	五三——五五	一二一——一二七	
第二十八章	五五——五八	一二八——一三一	
第二十九章	五八——六〇	一三一——一三三	

第三十章	六〇——六三	一三三——一三九	
第三十一章	六三——六六	一三九——一四〇	
第三十二章	六六——六八	一四〇——一四三	
第三十三章	六八——七〇	一四三——一四六	
第三十四章	七〇——七一	一四六——一四八	
第三十五章	七一——七二	一四九——一五〇	
第三十六章	七二——七三	一五〇——一五二	二二——二四
第三十七章	七四——七五	一五二——一五四	
第三十八章	七五——七七	一五四——一六一	
第三十九章	七七——七九	一六一——一六七	
第四十章	八〇——八〇	一六七——一七〇	
第四十一章	八〇——八三	一七一——一七七	
第四十二章	八四——八五	一七七——一七九	
第四十三章	八五——八六	一七九——一八〇	
第四十四章	八七——八八	一八〇——一八二	
第四十五章	八八——八九	一八二——一八四	

第四十六章	八九—九〇	一八四—一八五	四五—四七
第四十七章	九〇—九一	一八六—一八七	
第四十八章	九一—九二	一八七—一八九	
第四十九章	九三—九五	一八九—一九二	二四—二六
第五十章	九五—九七	一九二—一九六	四〇—四二
第五十一章	九七—九八	一九六—一九八	
第五十二章	九八—一〇〇	一九八—二〇二	二六—二九
第五十三章	一〇〇—一〇一	二〇二—二〇五	
第五十四章	一〇二—一〇三	二〇五—二〇八	
第五十五章	一〇三—一〇四	二〇八—二二二	
第五十六章	一〇五	二二二—二二四	
第五十七章	一〇五—一〇七	二二五—二二九	三〇—三二
第五十八章	一〇七—一〇八	二二九—二三二	三二—三五
第五十九章	一〇八—一一〇	二三二—二三六	四三—四五
第六十章	一一〇—一一一	二三六—二三八	
第六十一章	一一一—一一二	二三八—二二九	

第六十二章	一一二—一一四	二三〇—二三二	
第六十三章	一一四—一一五	二三二—二三四	
第六十四章	一一五—一二七	二三四—二三八	
第六十五章	一二七	二三八—二三九	
第六十六章	一一八	二三九—二四〇	三五—三八
第六十七章	一一八—一二〇	二四〇—二四二	三八—四〇
第六十八章	一二〇	二四二—二四三	
第六十九章	一二一	二四三—二四五	
第七十章	一二一—一二三	二四五—二四六	四七—四八
第七十一章	一二三—一二三	二四六	
第七十二章	一二三—一二四	二四六—二四七	
第七十三章	一二四—一二五	二四七—二四八	
第七十四章	一二五—一二六	二四九	
第七十五章	一二六—一二七	二五〇	
第七十六章	一二七	二五〇—二五一	
第七十七章	一二八	二五一—二五二	



第七十八章  
第七十九章  
第八十章  
第八十一章

一二九	二五三—二五四	
一三〇—一三一	二五四—二五六	四八—五〇
一三一—一三二	二五六—二五八	五〇—五二
一三二—一三三	二五八—二五九	五二—五五

(以上)

大正十二年四月十五日印刷  
大正十二年四月二十日發行

定價四圓五拾錢 送料十八錢

編輯者兼  
發行者  
關 儀 一 郎  
東京市本郷區駒込神明町九十五番地

印刷者  
原 子 廣 宣  
東京市外西巢鴨町宮仲二七一一番地

印刷所  
無我山房印刷工場  
東京市外西巢鴨町宮仲二七一一番地

發行所  
東洋圖書刊行會  
東京市神田區和泉町一番地一號

不許  
複製

570
38

終